

## 茶の湯史と茶の湯茶碗

～美濃焼の茶陶を例として～

History of Tea Ceremony and Tea Cup of Tea Ceremony

— As Case in Tea Ceramic of Mino Ceramic Ware —

熊田喜三男

Kisao Kumada

### はじめに

茶の原産地はインドと中国の二国であるとされている。茶は日本の自生説というものもあるが、中国からの渡來說が一般的となっている。栄西が中国に渡り修行し、日本に帰る折に、茶種を持ち帰り、茶の栽培法を広めたとされている。中国から帰国した栄西は九州の平戸島浦に到着した。持ち帰った茶種を最初に筑前（福岡県）の背振山の靈仙寺の西ヶ谷と石上坊に蒔いたとされている。栄西が京都郊外の梅尾にある高山寺の明恵に茶種を贈ったのは、それから10数年後のことで、この地が茶（梅尾）の生産地となっている。茶の湯とは、茶（葉）を用いて湯を沸かして茶をたてて飲すること、ただそれだけのことである。茶の湯（茶道）の始祖は村田珠光であり、茶の湯は親睦の場であり、寄り合いの場でもあり、このような茶の湯を作ったのは武野紹鷗であった。千宗易（利休）は、その紹鷗について茶の湯を学んだ。宗易は朝廷より利休という号を得て、その後天下一の宗匠となった。利休には多くの門弟がいたが、代表的な門弟として、蒲生氏郷、高山右近、細川三斎、芝山監物、瀬田掃部、牧村兵部、古田織部のいわゆる利休七哲がいるが、七番目という最下位の織部が茶の湯の名人と称された。織部の弟子に小堀遠州、上田宗箇、徳川秀忠などが挙げられる。

また、織部の茶の湯茶碗（茶陶）は力強いエネルギーが宿っており、桃山時代特有の創意に満ちた気風が伺え、正に日本一の織部と称されるところである。桃山時代は政治・経済・文化全般に大変革があった時代だが、焼物もその作風もかってない大きな変化が生じ、日本陶磁器の黄金時代とされている。自由で変化に富み、最も日本的な特質が現れた焼物が焼かれた時代である。武人（武士）が絶対的な権力を持った時代であり、織部は武人として個性にマッチした趣味を強く押しだし、個性的スタイルを茶陶に持ち込んだもので、茶の湯の個性化と称してもよからう。つまり、ひょうげもの、大胆不敵とも思われるほどのデフォルメされたデザインは織部好みと呼ばれた。それらについては本論で詳しく述べている。なお、平成26年（2014）6月11日は、戦国武将古田織部の四百年遠忌に当たり、追善の大茶会が織部の墓がある京都の大徳寺山内で実施され、数寄者と称された茶陶制作にも才能を発揮した織部のファンが集った。大徳寺塔頭の黄梅花院、芳春院、総見院に茶席を設け、ゆがみがあり、斬新なデザインの「黒織部波図茶碗」など織部ゆかりの茶碗（茶陶）、茶杓の他、桃山時代の名品を多く揃えられた。芳春院では着物姿の女性で一杯になり、参加者は茶碗や茶入れなど手に取って鑑賞し、名品の出会を楽しんだとのことである（『中日新聞』2014年6月11日、夕刊）。

そこで、本稿では「茶の湯史と茶の湯茶碗」～美濃焼の茶陶を例として～、というテーマをもとに、茶の木：茶の意味と起源（茶の学名、紅茶と緑茶、茶の原産地…）、茶の伝来と栽培（茶の渡來說、栄西と茶、明恵と梅尾…）、茶の湯の心：茶の湯の概念（茶の湯＝茶道と生活文化、茶の湯の精神、茶禅一味の境地…）、茶の湯の歩み（闘茶の会、茶道の開山・村田珠光、武野紹鷗と千利休…）、茶の湯の宗匠：千利休と門弟（利休と七哲、七哲の筆頭・蒲生氏郷、茶の湯名人・古田織部、きれいとい小堀遠州、上田宗箇と織部灯籠…）、茶の湯の茶碗：茶碗の内容（茶碗と和物茶碗の発生、織部と茶陶、備前・信楽・唐津・萩焼、桃山時代と茶碗…）、美濃焼の茶陶（桃山時代の意味、美濃焼の特長、黄瀬戸、瀬戸黒・織部・志野焼、織部茶陶の特徴…）などといった観点からアプローチし、整理的・点検的に考察を試みたものである。

## 1. 茶の木

### (1) 茶の意味と起源

織田信長は、武士と町人との関係は欠かせないものとして、より深い関係を一層強化しようとしていた。天正元年(1573)11月23日、津田宗及、今井宗久、千利休の三人の有力堺衆を招待し、京都・妙覚寺で実施した茶会で信長は貴重な茶道具を披露した。その折、信長自ら茶をたて三人の客に豪勢な料理や菓子をだし与えるなどして、破格の歓待をした。また、天正2年(1574)3月24日、京都・相国寺で実施された茶会にも信長は、後に茶の三大宗匠と称される宗久、宗及、利休をはじめ堺の茶人たちを招待している。また、信長は正倉院に収納されている名香木の一片を切り取る許可を天皇から得て、相国寺での次の茶会でこの香木を使用し、三大宗匠たちにも香木の断片を与えている。この香木の断片を与える行為は、信長が天下人であることを誇示する象徴的な行為で、政治的権威を正統化する試みであった。信長は石山本願寺を攻落するに当って、堺の茶人たちを味方につけ、親密度を高めておかねばならなかった。そのため、信長が堺の茶人たちを三回も茶会に招待した大きな理由であろう。天正3年(1575)10月28日、京都・妙覚寺で実施した茶会に、信長は京都と堺の茶人17人を招待しているが、茶頭は利休であった。この茶会は信長が加賀(石川県)と越前(福井県)の一向一揆を鎮圧した直後に実施したもので、勝利を祝う会でもあった。信長は天下統一達成の総決算ともいえる完成したばかりの安土城中に設けた茶室を利休に与えている。信長は豪華絢爛にして大規模な城を構築することによって、城という軍事的、政治的権威の象徴と儀礼的行事を実施する上、天下人に欠かせぬ茶の湯を結びつけたのであった<sup>1)</sup>。

では、その茶の湯の茶に関してみておこう。まず、茶(チャ)は生物の界、門、綱、目、科、属、種の七段階に分類される。それは植物界、被子植物門、双子葉植物綱、オトギリソウ目、ツバキ科、ツバキ属に含まれる常緑広葉樹の一種で、生葉を収穫して、これを原料として生産する。以前は植物の茶も製品の茶と共に茶と表現していた。昭和50年(1975)頃から学会などで、植

物は片仮名でチャ、製品は漢字で茶を用いるようになったが、一般には煩雑を避けて茶に統一している。茶の学名は、カメリア・シネンシスで、日本の茶の学名を付したのは、元禄3年（1690）に来日したケンペルであり、茶にテアという学名を与えた。その後、リンネは1753年にテア・シネンシスおよびカメリア・シネンシスという学名を発表した。学名をテアにするかカメリアにするか混乱を引き起したが、牧野富太郎が昭和15年（1940）にテア・シネンシスとしたことにより、日本ではこの学名が受け継がれている。しかし、1958年、イギリスのシーリーがツバキ属に関する研究成果を発表して以来、その区分に多くが従うようになった。そこで、茶をカメリア・シネンシスとし、ことに中国種をシネンシス、アッサム種（インド）をアッサミカとした。中国種は日本でも栽培され、その後インドネシア、トルコなどに導入された。これらの茶の生産形成は、緑茶生産に向けられる中国種と紅茶生産に向けられるアッサム種（インド）の二大グループとなった<sup>2)</sup>。さらに、茶は摘んだ葉の処理方法により、種々の形状に区別され、それにより飲み方にも違いがでてくる。とくに、茶の葉に含まれる酵素の処理方法により、根本的な違いができる。酵素を醗酵させないで作る緑茶と醗酵させて作る紅茶に区別される。緑茶と紅茶の中間に半醗酵茶の存在があり、これが烏竜茶と呼ばれるものである。また、緑茶の処理方法として、蒸し製（茶の葉を蒸す）、炒り製（茶の葉を釜で炒る）がある。その他として煮る製（茶を煮る）もあるが、これは蒸し製の一種といえよう。また、蒸した後の処理方法の違いによるものもある。抹茶（挽き茶）は白で挽いて粉末にしたもので、主に茶の湯（茶道）に使用する。また、玉露は香りが高く甘味を有する優良の煎茶で、その煎茶は葉茶を湯で煎じだした飲みもので、一般に玉露と番茶の中間にあるものを指している。番茶は最初に摘む新芽が一番、番茶も出花と称されるように、入れ立ての番茶は美味しいとされている。その次に摘むのが二番茶、その後の堅い葉から作った品質の少し劣るものを煎茶といっている<sup>3)</sup>。その煎茶は中国より来朝して黄檗山万福寺を創立した隠元により紹介されたものといわれている。だが、茶飲みの習慣が日本で大衆化したのはずっと後のこ

とである。その後、煎茶は国民飲料としての地位が確立するのである<sup>4)</sup>。

日本への茶の招来は、歴史的には建久2年(1191)頃で、初期には主に平坦地や丘陵地に稲作と共に発展したものとされている。平坦地や丘陵地の茶以外に、山地焼畑農耕を基本とした茶も存在していることも明らかになっている。これは、主に釜炒り製茶で、日本の主流をなす蒸し製茶とは異なっている。日本人が最も広く親しんでいる喫茶法の呼称は煎茶である。中国の喫茶習俗の中で、日本的な煎茶法で飲まれているのは、福建省南部と広東省東部の境界地の閩南地方である。この喫茶法を中心に茶の関わりをみると、現在の日本茶は中国の華南地方から招来したと推測される。しかし、日本の茶は茶型、樹型からみて中国の雲南省や東南アジアの茶とは生態系が相違しているようである。中国の茶は耐陰性が大で、照葉樹林下でも共生可能であるという特性を持っている。だが、日本にきた時には耐陰性が小さくなっており、照葉樹林下では生育不可能となっていたが、人工的に日照のある場所で生育させることにより、生育栽培が可能となった<sup>5)</sup>。そして、また樹型や葉型は中国種に比べるとアッサム種(インド)が大きく、樹型高は10メートルを越すものがある。だが、中国種は4メートル程度で、葉型の大きさもアッサム種が大きく、中国種は小さい。耐寒性は中国種が強く、アッサム種は弱い。カテキン類はアッサム種が25~30パーセントであるが、中国種は13~17パーセントである。酵素活性は、一般的にアッサム種は強く、中国種は弱い。そのため紅茶にはアッサム種が適しているが、緑茶には中国種が適している。茶は極めて変異に富み、未知のものが多く、茶の分類についても流動的な側面が多いのである。それでは、茶の源は中国かインド(アッサム)のいずれかということになるが、1823年、イギリスの陸軍大佐ブルースがインドのアッサムの山中で、大型樹のアッサム種を発見して以来、中国に存在する小型樹の中国種とは異なるものである。それ故、茶の原産地はインドと中国の二国であるとされている<sup>6)</sup>。

そして、日本へは中国からの茶樹が渡来したとする渡来説が一般的であるが、それに対して日本で生育した自生説もある。それは、日本が大陸と地続き

だった頃、約1万5000年前以前、日本でも茶樹は自生的に生えていたとする説と、有史時代になって人間により人為的に中国からもたらされたとする説の二説である。自生説では、日本に茶樹が自然に生えていたことになるが、その根拠とされたのは、その1、今なお人里離れた全国各地の山中に自生した茶樹（ヤマチャ）が発見されている。その2、大正・昭和戦前期の発掘調査で、縄文・弥生時代の二か所の泥炭層から茶の実が出土している。その3、昭和45年（1970）に炭田（山口県宇部市）から古代第三紀始新世後期（4500～3500万年前）の茶葉六点、茶の実二点が発見されたことなどである。しかし、現在では自生説は否定されている。その理由は、その1、現在は人の住んでいない山中でも、かつて寺や民家があった場所が多いこと。また、現在ある茶樹は、かつての山茶園跡が野生化したものと推定される。その2、発掘出土品は混乱の生じ易い泥炭層中にだけしか発見されていないので、発掘時の時代的な判別の正確さが問題視される。精度が上った後の発掘でも、先史時代の茶の出土は一例もない。その3、茶葉の化石についても、鑑定が疑問視される。仮に鑑定が正しく、日本に茶樹が自生していたとしても、その1、その2の理由を考え合わせると日本の自生説は消滅することになる<sup>7)</sup>。

かくして、信長は天下人に欠かせぬものは茶の湯であるとして、天下人と茶の湯を結びつけた。茶の湯に用いる茶はツバキ属に分類され常緑広葉樹の一種で、茶の生葉を収穫し、これを原料として茶を生産する。その茶の原産地はインドと中国であるが、日本への茶の招来は中国となっている。なお、茶は日本の自生説もあるが中国からの渡來說が一般的（通説）である。

## (2) 茶の伝来と栽培

茶は健康飲料、嗜好品として2000年以前から使用されてきた。茶の木（樹）の発祥地は日本の自生説ではなく、中国からの渡來說が主流となっている。中国では茶は唐時代には、ほぼ中国全土に普及し、近隣諸国にも伝来されていた。8世紀後半に中国では、茶の起源、栽培の適地、製茶法、飲み方、効能、器具までが詳述された世界最古の文献がでている。唐時代に続く、宗時

代には法律により茶の栽培が保護、促進されるようになった。たとえば、具体的な製茶法をみると、茶の若芽を蒸し臼で挽いて、固めて乾燥させ、団茶を作る。そして、これを火で焙り、挽いてから粉末にし、沸湯した湯に入れ、煮立させて飲むなどと伝えられている。最初に茶葉を蒸し、さらに茶の粉も一緒に飲むという視点からすると抹茶は唐時代の喫茶法を継承した飲み方といえよう。また、日本で茶を普及させたのは、臨済宗の開祖として知られている栄西禅師である。建久2年（1191）、栄西は二度にわたり宋に渡り、天台山萬年寺などで修行をし、二度目の留学から日本に帰る折に、茶種を持ち帰り、茶の栽培法や喫茶法を広めたとされている<sup>8)</sup>。茶木栽培の拡大と並行して、茶（抹茶）を飲む風習は、貴族や僧侶の間に普及し、薬用としての用途から徐々に嗜好飲料として、日常生活の中で愛飲されるようになった。さらには、茶は武士の世界にも普及していったのである<sup>9)</sup>。このように、当初、茶は薬用であったと伝えられているが、それを否定する説もある。中国の茶に関する初期の文献には、茶の薬効が書かれておらず、それが確認されるのは唐時代からとされている。だが、茶葉は覚醒や疲労回復作用があり、茶の飲用法も漢方湯薬の飲み方と共通していることは見落せない。つまり、葉を煎じ、薬効成分を飲むという点では、茶と漢方湯薬とは同じ技術で作られている。茶の飲用法は限りなく薬湯に近いものであり、単なる嗜好品だったとは考え難い。日常的に飲まれている保健飲料のようなものだといってよいだろう。つまり、茶が長期的服用により寿命を延ばす仙薬の一つと認識されよう<sup>10)</sup>。茶は不老長寿の仙薬と称されているが、仙薬とは混合したという意味である。つまり、茶とは種々の成分を有していて、それが混合一体となって、健康に良いということを示している。ただ一つの成分で健康に良いということではない。たとえば、血圧を下げるのに良いといっても、血圧を下げる効果だけではない。だが、茶はどれがどのように効き、関わっているか明確に判明しないが、成分が混合することで、総合作用を発揮している。今日、健康茶と称して様々な種々の茶が存在しているが、何故にこのような健康茶があるかという、やはり化学的に合成した薬と自然から生じた薬とは違って

いるからであろう<sup>11)</sup>。

さて、栄西が日本に帰る際に持ち込んだとされる喫茶法は抹茶式で、布教を目指した臨済宗と共に拡大していった。栄西が喫茶養生についての文献を完成したのは、承元5年(1211)で、茶飲用途の再出発点とされているが、この時はまだ薬用途の側面が主体的であった。しかし、その後、栄西は妙薬で飲料でもある茶の特質を十分に心得て、使用し普及させたと推察される。栄西が将来した植物としての茶の実情は明かでないが、とに角、栄西は茶の種子を明恵上人に贈っている。種子を贈られた明恵は梅尾山に高山寺を中興開山し、この地が梅尾茶の生産地となった。さらに、明恵は高尾の上覚上人に茶の実を贈るなど、茶生産の拠点が人間関係を通じて作られると同時に、種子の形で伝播したことは明らかである。栄西の法子孫で、曹洞宗を開いた道元は茶礼を勧めており、また律宗によって西大寺を中興した叡尊、忍性らも喫茶の習慣を推進していった。とくに、叡尊は茶飲用の一形式として、儲茶(施茶)という言葉を使用している<sup>12)</sup>。それはさておき、日本に帰国した栄西は、九州の平戸島浦に到着したのである。持ち帰った茶種は、最初に筑前(福岡県)背振山の靈仙寺の西ヶ谷と石上坊に蒔いたとされている。これを記念して背振山には日本初古之茶樹栽培地と刻まれた石碑が立てられたとのことである。栄西が京都郊外の梅尾にある高山寺の明恵に茶種を贈ったのは、それから10数年後のことである<sup>13)</sup>。このような栄西であるが、栄西は鎌倉・三代将軍実朝とは少なからず関係がある。実朝は若い時から京に憧れ、早くから和歌を志ざし、藤原定家より万葉集など贈られ、実朝も和歌集をだすほどの歌人であった。実朝は頼朝の第二子であったが、政権はすでに母・北条政子の一族である北条氏に握られていた。北条氏の傀儡に祭り上げられた実朝は、実朝一代で源氏は廃絶し、最後の将軍となるかも知れないと思い苦悩していた。それを紛らわすため、酒を飲み過すことがしばしばであった。そのため実朝は酒酔に苦しめられていたようである。その折、偶然にも鎌倉で、禪寺を広めていた栄西は、早速、良薬と称して実朝に茶を勧めると共に、喫茶養生に関する一書を献じた。実朝に茶の効用を説いた栄西は、備中(岡山



県)の吉備津神社の神宮・賀陽氏の出身である。14歳で比叡山に登って出家し、天台宗の密教である台密を学習したが、宋では禅宗が盛大なることを聞き及び宋に渡った。そこで偶然にも東大寺を再興した俊乗坊重源に出会い、一緒に天台山萬年寺に向い羅漢に茶を供したとされている。先に示したように、帰国の際に茶種を持ち帰り、明恵上人に茶種を贈り、これが梶尾の茶の起源となっていくのである<sup>14)</sup>。

ちなみに、明恵上人の実名は高弁といい、紀伊(和歌山県)で武士であった平重国の子として、承安3年(1173)に誕生している。16歳の時、叔父・上覚を師として出家し、東大寺戒壇で受戒した。以後、東大寺の尊勝院で華嚴などを学んだが、21歳の時に国家的な法会への参加要請(公請)を拒否して遁世した<sup>15)</sup>。栄西と明恵が知り合ったのは、栄西が建仁寺を建てた数年後のことと思われる。ある日、明恵は宋から帰国し、新しい禅宗の布教活動している評判の高い栄西に会うため建仁寺を訪れた。明恵が門前に差し掛った時、栄西も宮中からの帰りで颯爽として寺に入ろうとするところであった。それに対して、明恵はやつれた衣に草履ばきという姿でみすぼらしい姿では、面会は適うまいと引き返そうとした。その時、栄西はすぐに、供の者に明恵を連れ戻らせ、寺内で宗義について幾時間も論じ合ったとのことである。この話は栄西と明恵の人格を良く表わしている。栄西との話の中で茶を勧められ、飲んだ体験から茶に対する関心が高まり、茶樹(木)や茶の効能について熱心に質問し尋ね求めたというのである。今でも梶尾の高山寺には、この時栄西から明恵に茶の種を入れて贈られたという漢柿蒂茶入が伝わっている<sup>16)</sup>。梶尾の気候は川霧が立つような冷涼な地で、茶の生育に最適で、良質な茶が栽培され、これが日本初の茶園として発展していった。そのため、この地の茶は格別として、本茶と呼称するようになった。その後も明恵は宇治、仁和寺、醍醐など茶栽培の最適地を求めては、茶種を植えてその栽培法を指導し、その努力が茶の普及に大きな力となった。中でも名高い宇治の歴史は明恵が、13世紀初、宇治郡大和田(宇治市)に茶園を開拓したことに始まるといわれている。黄檗山萬福寺門前には、明恵が馬で田中を歩き回り、規則正しく付

いた足跡に種を蒔かせたという言伝えによる記念碑が立つという。宇治は宇治川の流れにより川霧が立ち込める美しい景観を作り、平安貴族たちを魅了する別荘地となっていた。また、川霧には茶を霜害から防ぐ効果があることから、宇治の茶栽培は順調に発展し、本茶と称された梅尾の茶と遜色のないほどになったのである。さらに、室町幕府・第三代将軍足利義満は、宇治茶の栽培を奨励し、諸将にも新たに森、祝、宇文字、川下、奥の山、朝日の六つの茶園を開拓させた。さらに、戦国時代末期、宇治茶師・上林氏が開拓した枇杷（琵琶）茶園を加えたものを宇治七茶園と称した<sup>17)</sup>。ちなみに、「茶という日本語は普通お茶と敬語の接頭語をつけて用い」（『日本文化を英語で説明する辞典』21ページ）ている。

かくして、茶種は中国から日本へ持ち帰ったのは臨濟宗の僧・栄西である。栄西は九州の平戸島浦に到着し、茶種を筑前（福岡県）の背振山の霊仙寺の西ヶ谷と石上坊に蒔いたとされる。その10数年後、梅尾の高山寺開山の明恵に茶種を贈っており、この地が茶の生産地となるが、その後明恵は適地を求め宇治に茶園を開いた。

## 2. 茶の湯の心

### (1) 茶の湯の概念

茶の湯とは茶道とも呼称され、「これは、伝統的に儀式化された様式に従って、抹茶に湯を注いでお茶をたて、客にすすめ、味わうもので」（同上書『日本文化を英語で説明する辞典』231ページ）あるとしている。つまり、茶の湯とは湯を沸かし、茶をたてて茶を飲むこと、唯それだけのことである。それなのに、世間は伝統芸術であるとかいうが、とても芸術とは考え難い。宗教の芸術をみても、キリスト教では祭壇を彫刻や絵画、工芸品で荘厳化し、教会そのものを美しい建築としている。これらは、立派な芸術であり、心を打つものであるが、キリスト教の道（本質）を突き詰めていけば、神への信仰そのものに帰着する。茶の湯が道として捉えられれば、つまり茶道と称されるようになった背景には、楽しみとし始めた積りが、気付いてみれば決し

て、それほど生易しいものでないことに気付くのである。茶室を作り、道具を揃え、茶会を催し、美味しい懐石でもてなされても、何か満されないものを感じる。他方、日常生活でも食事の後、ポットの湯でたててもらった薄茶の一杯が、心に響く深き良い思い出になることもある。茶の湯とはこのような日常そのものが基盤となっているのである。それをベースとしながら茶の湯は、茶室や庭を作り、道具を選択し、掛け軸を掛けた。これこそ芸術を生活の中に取り込んだといえよう。茶の湯が生活する家に芸術を持ち込み、美の世界を構築したのである。しかも、茶の湯は宗教の儀式のように食べる、飲むものを聖なるものとし、人間の生活そのものを生活芸術（文化）として芸術化したのである。すなわち、人を招き、食事と茶をもてなすという日常的な事柄を芸術的表現の場（茶会）としたのである<sup>18)</sup>。このような聖なるものと関係した生活行動が、一般的に宗教と称される文化現象なのである。つまり、宗教は超自然的な方法により、人間生活を豊かにすると共に、種々の生活苦から救済する機能を有するものである。一般に宗教といった場合には、特定の教祖（キリスト教、仏教、イスラム教など）の教えに基づいた創唱宗教が注目され勝ちである。だが、未開の孤島などでは、住民たちが社会的共同生活の中から慣習ともいえる宗教（儀礼）に導びかれて日々の生活を営んでいるのである<sup>19)</sup>。つまり、宗教は社会の究極的関心に向けられた信仰と行為の体系であると規定することができるのである。たとえば、宗教的文化とは経験的存在と経験を越えた超越的存在との区別に関わる信仰と象徴（価値）の体系で、経験的存在は経験を越えた存在に従属しているものであると考えられている<sup>20)</sup>。

さて、生活文化としての茶の湯は大成期までは、新たな点前や行為や茶室・露地の改革によって評価されていた。だが、その改革後は、茶人は定型化された茶室・露地で定まった道具を使用し、流儀により定められた点前作法で茶道（茶会）を行なうようになった。そこで、人々は安心して茶道を習い、自分なりの茶を楽しむことができた。そして、他の芸道と違うところに茶道の価値を見出されていた。価値とは「対象をひきつける力をいう」（『岩波小

辞典心理学第3版』31ページ)のである。たとえば、ある茶人が利休と大名たちを招待したところ、緊張して手が震え、茶杓を落すやら茶筌を倒すなどさんざんな点前となった。だが、利休は天下一の点前と誉めた。理由を大名たちに尋ねられた利休は、その茶人は湯が滾っている内にと急ぐあまり失敗したというのである。茶の湯では心の持ち方が最大事とされている。他の芸道でも心の重視がみられるが、茶の湯は芸道と日常生活との境界がとくに低いのである。生活文化とか生活芸術とか称されるのはそれ故である<sup>21)</sup>。茶の湯は日本独特の生活文化として発達してきたが、茶の湯に関連するものは、たとえば庭園、木、草、苔、石、砂、水、建築、建具類、障子、襖、畳、掛軸、置物、花、花入、点前用の道具、懐石用具、露地用具、照明道具、菓子、菓子器など多岐にわたっている。茶の湯を通じて日本の生活文化のいき(粹)に触れることができるといっても過言ではなく、ここに茶の湯が愛好され続けた理由があろう(『茶道ハンドブック新版』3ページ)。「いゝは江戸時代後半に町民が求めた美的・道徳的理想で」(前掲書『日本文化を英語で説明する辞典』99ページ)ある。茶の湯の及ぼした生活文化的影響は建築・庭園などに留まることなく、茶の湯の広がりと共に、茶の湯以外でも拡大していった。とくに花は利休流、織部流、遠州流などと呼称される華道流派ができたし、それが今日の生け花(華道)の成立とされている。料理でも茶会風の料理をだす会席(懐石)料理屋が現れた。陶芸と茶の湯と深く関係しており、その影響は日本人の思想や美意識にも及んでいる。このように、それらの諸要素が反作用的に茶の湯精神から日本文化の各分野に拡散していったといえよう<sup>22)</sup>。

茶の湯の精神を良く示しているものに、利休の教えとされているが、和敬清寂という言葉がある。和は交友、敬は敬う、清は清い、寂は悟りの世界のことであり、その悟り(世界)とは、禅によれば、人が到達すべき境地である。とくに、清と寂であるが、それらは同じではない。たとえば、どうせまた葉が散るからといって掃除しなければ清にはならないが、葉を拾い続けければ寂の境地に達しない。つまり、清を内包するものとしての寂があるといえ

よう。寂は侘びと並んで茶の湯の美意識を端的に示す言葉である。その寂は物の不足した、欠けた状態により生起される感情のことである。だが、侘び、寂びの区別はし難いが、共にマイナスのイメージを有する用語であろう。中世になるとプラスのイメージにして、美学にしようという意識が芽生えて、寂びの系譜になる冷え枯れた境地へと進む、冷え枯るるという言葉が理想の境地とされるに至った。ありふれた道具しか持たない茶人を侘び茶人と称した。このような茶こそ禅の精神に適った茶の湯の境地であることを認めるようになり、ここに侘び茶が確立し、侘びこそが茶の湯の基本精神となった。客は上下の身分を問わず招かれて、侘び茶は主客の心が一つになって作られるのであり、それこそてなしの芸術なのである<sup>23)</sup>。また、茶禅一味という言葉があるように、禅と茶の関係には深いものがある。日本の茶の文化は、当初から仏教と縁の深いものとして始まっていた。ただ、平安時代は唐時代の詩人・文人の喫茶精神に学ぶことが多かった。だが、仏教的な宗教精神を茶の世界に求めることは少なかった。喫茶の精神に仏教が深く関係し、茶禅一味の境地に到るには、まだ長い歳月を要した。だが、主要知識人の多くが仏門に関係し、その世界の指導者だったので、この時代の主な事跡は、殆んど僧界が占めるところとなっている。真言宗の安祥寺（京都・山科）に残されている記録により、僧院での喫茶の普及を知ることができるとされている<sup>24)</sup>。また、禅宗寺院では修行の一環として、茶の栽培と製造を実施しているので、禅宗寺院が各地に拡大していくにつれて、全国へ茶の湯・種と茶の製造技術が広がった<sup>25)</sup>。

かくして、茶の湯であるが、茶の湯とは茶(葉)を用いて、ただ湯を沸かして茶をたてて飲むことである。その茶の湯は日常生活そのものの基盤となっており、生活する家に芸術を持ち込み、美の世界を築いたのである。しかも、茶の湯精神は宗教の儀式のように食べる、飲むものを聖なるものにし、人間の生活そのものを生活文化：芸術化したのである。

## (2) 茶の湯の歩み

嵯峨天皇が近江・韓崎（滋賀県大津市唐崎）への行幸の途中、梵釈寺で大僧都永忠の煎じた茶を飲まれた。その永忠は奈良時代に渡唐し、その地で30年間暮した僧である。そして、永忠は長安にやってきた空海の世話をした後、最澄と共に遣唐使船で帰国し、梵釈寺に住んでいた。まず、嵯峨天皇一行が立ち寄ったのは崇福寺で、さらに一行は崇福寺をでて、すぐ近くにあった梵釈寺で再び休憩している。永忠は先回りして再び現われ茶を勧めた。崇福寺、梵釈寺周辺の地形は、茶の名産地となる京都・梅尾と類似している。永忠は谷川に沿う梵釈寺等の周辺の山中に茶園を作ったと思われる。このように永忠を初め最澄、空海なども日本へ茶をもたらしたとする説もある。それは、大量の茶種を持ち帰らなければ、短期間で諸国へ配布するほどの茶の種は集まらなかったからである<sup>26)</sup>。空海と最澄とは同時代の仏教界の巨匠でありながら、その存在は世紀のライバルというほど対照的である。たとえば、最澄の書は清潔で簡素な筆致は、如何にも孤高の調べ高い人物を良く伝えており、誉める者は多いが嫌う者はいない。一方、空海は日本の書道史上で特筆すべき超一級の書家でありながら、意外にその書についての好評が分かれている。自由奔放な変幻性と粘着性とか生理的に合わないという人々も多くいる。最澄の生涯は単純直線型で閉鎖的・内向的であり、空海の生涯は複雑円環型で、開放的・外向的であるともいわれている<sup>27)</sup>。なお、最澄は渡来人の家系で近江（滋賀県）に生れている。15歳の時に国分寺で得度、最澄と名乗った。延暦4年（785）に比叡山に登り、仏道の修行に励んだ。ここに後に、比叡山延暦寺の基礎が築かれた。最澄は中国に渡り天台宗を日本に伝えた偉人として仏教大師と呼ばれた。最澄と並んだ人物として空海（弘法大師）がいる。空海は讃岐（香川県）の出身で、15歳の時に母方の叔父について学問をはじめ、18歳で儒教などを学んだが、その後四国の大滝獄や室戸崎で修行を励んだようである。延暦23年（804）に唐に渡り密教を学んだ。その密教を日本に移入し、発展させた。仏教の教えの中で密教（大日如来が本尊）を最も優れたものとする主張を展開したことが注目される<sup>28)</sup>。

先きに触れたように、嵯峨天皇は畿内および近江（滋賀県）、播磨（兵庫県）などの諸国に茶を植え、毎年茶を献上するよう刺命をだすと共に、抹茶法を伝達したとされる。その抹茶法は、直接に茶碗の中に茶の粉を入れ、これに湯を注いで飲むという薄茶に近い方法であった。そして、本格的に茶が飲まれるようになったのは鎌倉時代以降で、室町時代にかけて喫茶の会が盛んに催され、それが鬪茶の会である（前掲書『茶道ハンドブック新版』、192～194ページ）。最も単純な鬪茶は二種類の茶、本茶と称される質の良い茶（当初は梅尾茶、後に宇治茶）と非茶と称されるそれ以外の産地の質の良くない茶を使用し、どちらであるかを飲み当てるものである。合計十服で競うものを本非十種茶、四種類の茶を使用する四種一服など幾つかの形式があった。多く飲み当てた人が賞品を得るのである。賭事が成立した背景としては、茶の供給量が増加したことと、本茶と非茶の質（味）の差が大方なくなっていたことが指摘できる。もし、本茶と非茶の差が歴然としていたら、鬪茶は成立しなかったであろう<sup>29</sup>。本茶としての宇治茶は、今日どう定義されているであろうか、たとえば茶良漬は、京都で漬けても茶良漬というが、産地表示からすると京都で茶良漬という名称は、使用しえないことになる。日本の緑茶の製茶技術はすべて宇治から全国に拡大した。つまり、宇治茶（製法）がルーツになっているので、茶良漬の論理からすると全国のどこでも製茶されても宇治茶であろう。しかし、この論理は無理ということで、宇治茶とは淀川流域、つまり淀川に流入する宇治川、木津川、柱川などの狭い地域に限定し、その流域で栽培された茶を総称した。一定の歯止めをかけるため宇治茶の定義を決めることにしたのである。その定義は京都府、奈良県、滋賀県、三重県の四府県産業を京都府内業者が京都府内で、宇治地域に由来する製法によって、仕上げ加工した緑茶としている。平成18年(2006)、特許庁より京都府茶協同組合に団体登録商標宇治茶が認められた<sup>30</sup>。商標とは企業や個人が自己の製品やサービスに関して、他人のそれとは明確に違っていることを示すために付ける文字・図形・記号などである。その商標は商標法という法律によって保護されている。特許庁に出願することにより登録が許可され

ば、他人は勝手に使用できなくなる（『基本流通用語辞典』139ページ）。平成26年（2014）5月、茶寮都路里、中村藤吉本店、本久小山園など宇治茶に関する有名三社の社名やロゴマークが台湾で無断で商標登録申請されていることが調査で判明した。三社は登録しないように台湾側に求めており、また今後は知的財産への備えを強化していきたいとしている（『中日新聞』2014年4月15日、夕刊）。

さて、茶の湯、つまり茶道の開山として、崇敬されているのは村田珠光である。その理由は四畳半茶室を作り、長い間盛んに催された闘茶の風習を排除したからである。珠光は茶道の根底に禅があり禅宗を置くことを考え、一休宗純について参禅、印可（免許）の証しとなる圓悟克勤の墨蹟が与えられている。一休は臨済宗の僧で京都・大徳寺の住職であり、また圓悟克勤は中国・臨済宗の僧である。珠密は応永30年（1423）、琵琶法師の子として生れたが、11歳の時、出家し奈良の称名寺に入った。だが、茶を持って身を立たいと京都に上り、30歳頃に禅の修行をした。そこに応仁の乱が起こり10年に及ぶ戦乱の末、絶望ともいえる無常観が人々の心の中に漂い、従来の座席にみられる書院茶とは対照的に侘び茶道に向っていった。だが、書院の茶への名残りは捨てられず、台子（棚）飾り、掛けもの、香炉、花生けなどの道具並べは変わらなかった。中味は従来の荘厳さに重点を置いたものとは異なった美意識のもと、心の変革を求めた<sup>31)</sup>。心の変革とは、光り輝く照る月よりも雲間に隠れる月を偲んで眺める方が風情があるというのである。それは、偲ぶ心であり余情を感じる心であると称してよい。たとえば、余韻の残らない交際は、真の交りではないと同じである。珠光の言葉を見ると、単にそれだけを表わしているのではなく、むしろ完全なものよりも未完のものへの魅力を表しており、それは欠けているものへの愛情であり、未完のものに心ひかれることである。日本人が求め続けてきたものは、常々完璧なものより、温く、心の安らぎを覚えるものであろう。それを茶道でみれば、心の通わぬ茶会は、いかに豪華にみえても、本当に心を満たす茶会とはいえないのである。茶陶においても、完成度の高い宋時代の青磁の茶碗より、国焼の茶碗に傾い



ていったのは、本当に身に馴染む器を愛好したからであろう。それ故、新しい茶碗よりも、長年大切に使い込んだ茶碗が良いのである<sup>32)</sup>。

先に触れた応仁の乱などあった京都に対して、新しい都市・堺では茶の湯が盛んであった。堺は応仁の乱後、明貿易の発着港となり急速に進展し、諸国から人々が流入してきた。室町幕府が弱体化すると、会合衆により運営され、自治が行なわれた。茶の湯は親睦の場であり、寄り合いの場でもあった。このような茶の湯を作った中心人物は武野紹鷗であった。紹鷗は十四屋宗悟に茶を学び、三条西実隆に歌学を修め、古岳宗亘、大林宗套などにつき禅の修行をした。紹鷗は多くの名物（茶器）を持っていたが、主要な一点しかださないという茶の湯の姿勢であった。また、備前、信楽などの雑器も所有していて、それらを用いられた。雑器を用いることは、茶席に新息吹きを入れるものではあるが、誤ると茶席を低い程度のものに落しかねない。また籠類を柱に掛けて花を生けることも始めているが、その後、花を生けるから入れるに変わっている。これは花の自然を喪失しないような配慮を示したものである。紹鷗の弟子に千宗易（利休）がいる。宗易は紹鷗について学んだが、紹鷗の茶を継承しながらも、たとえば紹鷗の北向き茶席を南向きにするなど、師の形を真似したのではなく、さらに一歩進めている。天正13年（1585）10月、豊臣秀吉が関白となり、皇居の茶会の折には、宗易のみ秀吉の後見役に選ばれ、朝廷より利休という号を賜っている。その後、天下一の宗匠となった利休は、秀吉の側近として権威を持ち始めた。大名と秀吉との間の連絡、仲介や紛争の調停などにまで腕を振った（前提書『茶道ハンドブック新版』200～205ページ）。利休をはじめ、堺商人は畿内に勢力をふるい武士たちと密接な関係を結び、後に津田宗及、今井宗久、千利休の三人が信長の茶頭として用いられるが、武将たちと堺商人との間にやがて党派が成立する。中でも津田宗及と明智光秀、秀吉と利休の関係も深くなっていった。ただし、宗及、宗久と利休の立場は若干違っていた。宗及、宗久の二人は茶頭としての地位は高いが、政商の方が濃厚だった。利休は小身ながらも、茶数寄の才覚でその位置を確保していた。秀吉は貧しい出自や教養の乏しさ故か茶の湯に

関心と執心を寄せた。このような秀吉に利休は自らを重ね合わせ、秀吉に賭けた。足軽の子は天下人に、魚問屋の親父は天下一の宗匠としての茶の湯の世界に君臨した<sup>33)</sup>。

利休は天下一の茶の宗匠の地位を得、秀吉の茶の湯に強い関心を寄せていたので、秀吉に従う諸大名、武将も挙げて利休の茶を習うことになった。だが、それが内実のないものであったら、利休の名もその茶の湯も今日まで伝わることはなかったろう。利休は使う道具を自分好みで作らせるなど茶の湯を独自のものへと発展させた。利休は道具中心の茶の湯から精神性を重視する茶の湯への侘び茶を徹底させたのであった。一方、秀吉は黄金の茶室を御所に持ち込んで天皇に献茶したり、北野天満宮で、大掛りな北野大茶湯(会)を開いたりしている<sup>34)</sup>。天正15年(1587)10月の北野大茶湯には、誰れでも参席してよかったので、客は一日で800人を超えたと伝えられている。権力者としての豪華さと庶民性という秀吉の二面性が、そのまま反映された茶会であった。茶席を幾つか回った秀吉の政治的パフォーマンスとみるべきだろうが、それを見越しての利休の協力だったと感じる。だが、後の茶の湯に大きな影響を与えたものと思われる<sup>35)</sup>。大々的かつ盛大に催された北野天満宮は、学芸の神として知られた菅原道真公を祭った神社故に、これは茶の湯の発展を祈るための奉納茶会であったのである<sup>36)</sup>。このように利休は、他の人の追隨を許さない境地にあったが、天正19年(1591)2月、正確的には分からないが茶器の売買にからむ不正や大徳寺三門に自らの木像を掲揚したことなどで、利休は秀吉によって切腹を命ぜられ自刃した。利休の死後、慶長3年(1598)4月、秀吉は世を去った。なお、当時、多くの大名は茶の湯を嗜んだが、蒲生氏郷、細川三斎、牧村兵部、瀬田掃部、古田織部、芝山監物、高山右近、織田有楽などは茶匠としても一家をなした。利休が自分の後継者として織部と三斎の名を上げたという。三斎は大大名であり茶の湯は余技であった。織部は小禄で茶人と接する機会が多かったので、茶の湯の愛好者の中心的存在となった。織部はひずんだ茶陶など自由な姿のものを取り上げ、利休時代とは違った所作だった。織部の好みと能力は注目され、將軍秀忠の茶の

湯の指南となった。織部に茶を学んだ小堀遠州は茶の湯を親しみ、名器に接する機会も多く、審美眼を養い、鑑定なども行なった。茶の湯では茶匠として重きをなしていた。続いて片桐石州であるが、石州は遠州とは異なり地味な茶を説いた。石州流として全国の大名に伝えられた。利休の自刃後、その子道安、少庵は追放されるが、その後許されて茶の湯を続けたものの表立った活動はないまま一生を終えた。利休の孫の宗旦は茶法の修行をし、茶匠として信頼されるようになり、千家復興の礎を築いた。宗旦の長男の宗拙は家を継がなかったが、次男の一翁宗守（武者小路千家）、三男の江岑宗左（表千家）、四男の仙叟宗室（裏千家）は各々、高松松平家、紀州徳川家、加賀前田家に任官し、後に三千家家主（家元）となった（前掲書『茶道ハンドブック新版』、205～208ページ）。

さて、江戸時代から続いていた茶道の流派は、明治維新の影響で仕えていた大名家から禄を失くし、茶を習おうとする人が激減した。だが、町人層に多くの弟子を持っていた千家は、庶民に茶道を広げることで苦境を乗り切った。女子教育の側から茶道を取り入れようとする動きも生じた。明治8年（1876）に開校された東京の跡見学園（現・跡見学園大学）は華族の子女が多数入学し、花嫁修業の代表の一つとなった。このようにして、茶道人口は増大し、さらに流派内での家元と地方の交流は、より一層盛んになり、全国規模で統合化した組織も必要となった。また、組織的な茶道の指導が実施されるようになり、門弟の頂点に立つ家元の存在は重みを増し、家元を中心とする茶道の時代となったのである。茶の湯は生活様式そのものが急に変化している。それは、都会の住宅の多くが和室や庭がなくなり、正座したり和服を着けたり、純粹な和食を食べる機会もなくなった。従来を前提した作法も若い世代には伝わり難く、日常生活からは離れたものとなった。茶の湯を学ぶことで文化的教養が身に付くことは間違いないが、今日ではもう一度、日本文化の精神として再認識する必要があるだろう。茶の湯の伝統芸術としての真価に関し説得ある説明をし、人々の理解を得ることが重要な時代となったのである<sup>37)</sup>。

女子教育の面から茶道について、とくに熱心に力を入れた女性がいた。それが新島八重である。新島襄が亡くなると、寂しくもあったろうが、八重に心理的・時間的によやくゆとりが生まれた。茶の湯への慰みの発見である。八重は従軍看護婦の功績も認められ勲章を受けているが、その後も看護学校の助教も務め、看護についても深く学んでいたし、篤志看護婦のリーダーとしても活躍している。しかも、海外の女性との付き合いのある八重を裏千家の圓能斎は、裏千家の中で重用することを考えた。八重にはそれだけの力とやる気が充分にあったし、八重は茶道に夢中になり、打ち込んでいった。茶の湯の世界の上流婦人たちとの交流が広がって、八重にとって新しい喜びとなった。八重は圓能斎の期待にたがわず、入門から数年後には女子学生など若い女性たちに茶道を教授するまでになり、女子教育の中に茶道を浸透させるために懸命に働いた。明治政府は女学校制度の確立を図り、京都府は新英学校および女紅場を明治37年（1904）に京都府立第一高等女学校（現・鴨沂高等学校）に改称し、京都市では明治41年（1908）に京都市立第一高等女学校（現・堀川高等学校）を設立した。八重は両校の教授に就任し、学校茶道は八重の熱意の甲斐あって、やがて女子の高等教育の一環として全国に定着していった。また、八重を通じて裏千家と同志社とは浅からぬ継がり生まれた。新島襄、八重夫妻と圓能斎夫妻と非常に親交があったが、とくに八重はお茶好きで、圓能斎のもとに入門している。同志社との関係ができて、淡々斎は同志社の普通学校に進学している。千家と同志社の関係はここから生れたということである。同志社の女子教育に当たったデントンも圓能斎に入門し免許状を得ている。時をへて鵬雲斎も当代の坐忘斎・玄黙宗室も同志社（現・同志社大学）を卒業している<sup>38)</sup>。つまり、明治の変動期を越えて、裏千家発展の基礎が構築された。12世直叟玄室（又妙斎）、13世鉄中宗室（圓能斎）、14世碩叟宗室（淡々斎）、15代玄秀宗室（鵬雲斎）は平成9年（1997）、茶道界で初めての文化勲章を受章している。16代玄黙宗室（座忘斎）は平成14年（2002）に家元を襲名している（前掲書『茶道ハンドブック新版』、220ページ）。

かくして、嵯峨天皇が近江（滋賀県）への行幸の際、途中で梵釈寺で、周

辺を茶園にしていた永忠の茶を飲まれた。その後、天皇は諸国の茶の栽培を推め、茶を献上するよう勅命をだすと共に、喫茶法も伝達している。鎌倉・室町時代にかけて喫茶が盛んになり闘茶の会まで起きている。茶の湯の元祖は侘びの茶境を拓いた村田珠光である。さらに、侘びの境地を深めた人物は武野紹鷗で、茶の湯の大成者・千利休はその紹鷗に師事した。

### 3. 茶の湯の宗匠

#### (1) 千利休と門弟

千利休は大永2年（1522）、泉州（大阪府）、堺の魚問屋、千（田中）、与兵衛の長男として誕生し、与四郎といった。時に室町幕府末期の時代で、千利休の祖父は足利義政の同朋衆（近侍）であった。父の代になり海岸に納屋を持ち、納屋衆として成長した。利休が茶道に興味を示したのは17歳頃で、北向道陣に就いて本格的に茶道を始めた。堺は貿易港として重要な役割を果たした町であり、町それ自体は納屋衆とか会合衆と呼称される町衆によって、自治運営がなされていた。商工業はいうまでもなく、文化的にも繁栄していたし、茶の湯を作った人々は堺衆といっても過言ではなかろう<sup>39)</sup>。千利休も堺の納屋衆の出身であるが、今井宗久などの政商と違い、海産物を取扱う商人であった。利休は若い頃より茶を好み、茶道の修行に励んでいた。利休の最初の茶道の師匠は、医者・北向道陣であった。道陣は「利休の茶の湯入門の師、堺の茶の湯の発展に欠かせない茶人（『なも』、6ページ）であった。その道陣は武野紹鷗らと親交を結んでおり、利休の直向きな茶道に対する情熱を知って、利休を紹鷗に紹介した。利休は紹鷗という良き師に恵まれ、茶道の修行に打ち込み、励んでいくがその目指すところは、足利義政の書院台子の茶と村田珠光の草庵茶を総合したような侘び茶（茶の湯）を完成することであった。また、利休は大徳寺系の高僧について、禅の修行にも励んだようである。中でも利休は、笑嶺宗訴に参じて修行をした。笑嶺が堺の南宗寺から大徳寺聚光院の開祖となった折、多額の喜捨（寄附）をしている<sup>40)</sup>。南宗寺とは、禅宗寺院の面影を今日に伝える古刹であり、千利休や武野紹鷗が修

行した寺として知られている。静寂で広い境内には、国の名勝庭園に指定されている枯山水庭園の也、仏殿、山門、唐門などがある（『Sakaist』、12ページ）。

さて、利休の門弟という存在を如何に捉え、そしてその門弟たちは、それを如何に受け止めて、茶を構築していったかである。まず、利休の代表的な門弟といえば、利休七哲の名前が挙げられる。17世紀後半には、少々の異同はあるものの利休弟子衆七人衆の名前も挙ってくる。それらが豊臣秀吉配下の武将であるところが興味深いが、それらの人物が信長・秀吉時代からの武将茶人として、確実に評価が高かったことである。天正12年（1584）10月、秀吉の御座敷御茶湯では、茶堂役を利休、今井宗久、津田宗及が勸めている。また、招待された人物としては、今井宗薫、小寺休夢、松井友閑、細川幽齋、千紹安（道安）、万代屋宗安、山上宗二、住吉屋宗無、重宗甫、満田宗春、藤田平佐衛門、宇喜多忠家（秀家）、佐久間盛春（忠兵衛）、高辻（山）右近、芝山源内監物、今井隼人（津田宗凡）、古田左介（織部）、松井新助（康之）、中川忠吉、細井新介、牧村長兵衛（兵部）、円乗坊、樋口石見、徳雲軒（施楽院全宗）などとなっている。利休七哲と称される細川幽齋、高辻（山）、右近、芝山源内（監物）、古田左介（織部）の名前はある。だが、招待されていない側近中の側近の蒲生氏郷、細川三斎は国許の警護だった可能性が大であるが、瀬田掃部の名前はない。織田有楽は信長の弟という立場上、微妙な関係で招かれていないかも知れない。利休の高弟となる人物は武将、京都や堺の町衆、僧侶など多数いるが、その多くも秀吉は招待している。宗久の子息・宗薫、利休の子息・道安などもいる。これら利休の高弟とみなせる条件の一つは作為であろう。もちろん、作為だけで利休が認める茶人というわけではないが、これらの条件を満たすことも大切な要件であろう<sup>41</sup>。ちなみに、作為とは「つくりなおすこと。こしらえること」（『広辞苑〈第二版補訂版〉』875ページ）となっている。

先に幾分か触れたように、天正19年（1591）2月、利休は自刃した。恐らく幾つかの原因が複雑に錯綜していたのであろう。利休の没後、茶の湯は何人

かの人物により主導されることになる。いわゆる利休七哲と称される細川三斎や古田織部など、さらに千少庵、道安ら利休の子孫たちや織田有楽、上田宗箇などといってよかろう。それは、利休とその茶の湯に何等かの関わりを有し、後には茶道流派の祖となり、茶の湯の一つの型を確立した人物であった<sup>42)</sup>。古田織部を始祖とする茶道の流派「式正織部流」があり、その式正織部流は全国に複数ある織部流の源流である。それは、優雅な千家と異なり、武士らしくてきばきとした動きがあり、また祇紗を道具用と勝手用に使い分けたり、道具を畳に直かに置かず盆の上に載せたりと衛生的で、清浄の茶と称されている(『中日新聞』2014年5月22日、朝刊)。利休七哲とか七人衆など人々の口に上っていたようである。七人衆として蒲生氏郷、高山右近、細川三斎、芝山監物、瀬田掃部、牧村兵部、古田織部などとなっている。最後に指定されたと思われる七番という最下位の古田織部が惣和尚＝茶の湯の名人となったのである。時代の経過と共に、前田利長、織田有楽、荒木村重、千道安、佐久間不千斎、有馬玄蕃など入れ替わる場合もある。しかし、最もポピュラーだと称される利休七哲には、次のような人物が選ばれている。蒲生氏郷：信長、秀吉に仕え、小田原征伐後、会津若松城主となる。利休の没後、少庵を引き取り赦免に力を尽した。高山右近：信長、秀吉に仕え戦功を上げたが、秀吉の禁教令にたてついて国外追放となる。細川三斎：名は忠興、和歌、絵画に通じ、茶の湯では利休の最も忠実な後継者とされる。芝山監物：最初石山本願寺に属したが、後に信長、秀吉に仕えた。瀬田掃部：秀吉に仕えて近江に領地を有した。牧村兵部：信長、秀吉に仕え、岩手城主となる。古田織部：名は重然といい、信長、秀吉に仕え、利休没後、将軍秀忠の茶道師範となり、武家の茶を展開した<sup>43)</sup>。

利休七哲の筆頭は蒲生氏郷である。第一に選ばれたのは、千利休が自刃に追い込まれた時、子息を暖かく迎え、秀吉の許可を得て千少庵をして、京都に茶屋屋敷を建て、千家を旧復した功績である。時に氏郷は会津若松の大大名で、幼少の折の鶴千代の名を取って鶴ヶ城とした。また、城内に千少庵のための茶室も設けている。父の賢秀は信長に降伏し、鶴千代(氏郷)は人質

として岐阜城へ送られた。だが、信長は鶴千代の人物を見込み、三女の冬姫を娶らせている。瑞龍寺の南化禅師について参禅するばかりか、三条実枝さらに里村紹巴といった歌人に和歌を学び、茶の湯は千利休に学んだ。30歳のとき氏郷として、キリスト教の洗礼を受けている<sup>44)</sup>。会津若松の歴史は、輩名直盛が東黒川館を築いたことに始まるが、天正17年(1589)、伊達政宗によって滅ぼされた。その後、会津の領主となった政宗だが、秀吉の小田原の役に際し、陣営に遅参したことを問責され、会津を没収された。秀吉は蒲生氏郷を配し、92万石を与え、氏郷は七層の天守閣を築くと共に産業を興し、城下町を整備した。当時、黒川という地名であったのを若松と改めている。それは、氏郷の生まれ故郷、近江の蒲生郡にあった若松の森から取ったとされている。少庵が氏郷のために建てたとされる茶室麟閣があり、蒲生氏郷、千少庵が構築した会津での茶の湯の文化は、小堀遠州や片桐石州に学んだ保科正之へと受け継がれていった<sup>45)</sup>。氏郷の死後、上杉景勝が入封したが、領主が転変した後、加藤嘉明が入封した。城はその子によって大改築される。加藤家は幕府による大名取りつぶし政策によって改易された。その後、会津に入ったのは家光の異母弟、保科正之だった。城は保科家(後、松平性となる)の居城として幕末を迎える。ちなみに、今日、城の名は所在地の名で呼称されるのが習いで、会津若松城が正式名称、鶴ヶ城は通称となっている<sup>46)</sup>。

かくして、利休は多くの門弟を抱えていたが、代表的な門弟として、蒲生氏郷、高山右近、細川三斎、芝山監物、瀬田掃部、牧村兵部、古田織部の利休七哲と称される人たちがいる。七番目という最下位の古田織部が利休の後継者として、とくに武家茶道の確立に力を尽し、茶の湯名人(天下一の宗匠)と称された。

## (2) 古田織部とその弟子

利休の門弟の数は膨大である。秀吉以下、その時代に茶の湯を実施していた人々の殆んどが利休の門弟とされているが、現実的なものではない。それは、今日の茶道とは異なって、新たな作為・創意工夫によって、新しい茶を



作りだすことが求められたから、誰れが門弟であるかは、あまり意味はないといえよう。とはいえ、利休の指導を受け、その強い影響下で、茶の湯を実施し、後世へと継げた茶人がいる。それらは、武家の古田織部、利休の子の道安、少庵の三人が挙げられる。織部の弟子に小堀遠州が、また道安の孫弟子に片桐石州がでて、各々一派を立てている<sup>47)</sup>。さらに、上田宗箇を挙げてもよからう。それは利休とその茶の湯に何等かの関わりを有し、後に自己の茶の湯を一つの型として確立し、茶道流の祖となった人物であるからである<sup>48)</sup>。また、千家であるが、利休の切腹後、利休の子、道安、少庵は、京都を追放されるが、数年後、徳川家康等の取成して、千家の再興が許された。道安が堺の千家本邸を継ぎ、少庵が京都屋敷を継いだとされる。その後、道安の家系は絶え、利休の後裔は少庵とその子・宗旦のみとなった。その宗旦は大徳寺で禅僧になっていたが、千家再興に伴い、父・少庵のもとに帰り、茶人として過ごすことになった。茶道方として出仕する誘いはあったが生涯浪人生活を貫き侘茶を徹底・実践した。宗旦が仕官しなかったのは、祖父・利休が政治に関わり過ぎたため悲劇をみていたからとされている。しかし、宗旦は徳川幕府の安定を見極め、息子たちに仕官の途を探し、仕官させた。長男・宗拙（閑翁）は加賀（石川県）前田家に仕官したが間もなく辞し、後継者がいないまま亡くなった。次男・宗守（一翁）は一度養子にでて塗師となったが、千家に戻り讃岐（香川県）高松の松平家に仕官した。晩年、帰京し武者小路通りに官休庵を建立し、武者小路千家となった。三男・宗左（江岑）は紀州（和歌山県）徳川家に仕えた。後に京都の不審庵を継ぎ、表千家となった。四男・宗室（仙叟）は加賀前田家に仕官した。その後、不審庵の屋敷裏に今日庵を建て、裏千家となった。このようにして、利休の子孫は三千家に分離した。名千家の点前の相違はなく、同じ千家として一体感は強かった。また、利休に茶を学んだ藪内剣仲も茶人として京都で活動し、代々西本願寺に仕官し、茶道藪内流の家元となった。上京に住む千家は上流、下京に住む藪内流は下流と称されていた。千宗旦には息子以外にも多くの弟子がいたが、茶家として代々続く茶の家元ないし宗匠となっている<sup>49)</sup>。その家元、宗匠とは茶

道など芸道の正統を継承している人、あるいは継承している家のことを家元とっている。江戸時代中期に、元来仏教において学徳共に優れた名僧を呼称する宗匠という言葉が、芸道における最高峰を意味するようになり、流派の家元がこのように称されるようになった<sup>50)</sup>。

先に触れた小堀遠州であるが、遠州は幼名を作助といい、近江、小堀村の土豪、小堀新介の長男として誕生した。豊臣秀長、徳川家康に仕え、大名になった父・新介の後を継いだのである。遠州の履歴の中で、とくに重要なことは、建築造園に優れた才能を現わし、作事奉行を努めたことである。そして、遠州好みとさえ呼称されるデザイン感覚をリードする立場を得たのである。また、将軍をはじめ大名、公家衆、僧侶、町衆、牢人と遠州の友人は幅広く、まさに寛永文化を代表する数寄大名であったといえよう。茶の師匠の織部が理論派であったのに対して、弟子の遠州は綺麗キッハであったという。キッハとはぎっばで立派という意味であろう。美しく見栄のするのが遠州の茶ということで、正に綺麗という語こそ、人々が遠州の好みを思い浮かべる言葉であった。遠州の茶座敷である数寄の書院などを綺麗座敷と呼んだように綺麗(奇麗)という感覚は遠州個人の好みを超えて、一般性を持っていたことである<sup>51)</sup>。遠州は利休、織部に続き江戸時代初期の茶の湯を引張った人物で、織部の時代に流行した織部焼、志野焼とは異なり、さび(寂)、わび(侘び)と王朝文化の美意識を調和させたきれいさびを提案し、茶室、庭造りも指導し、総合芸術としての茶の湯の基を構築したとされている(『中日新聞』2014年4月3日、朝刊)。遠州の関係した茶碗、つまり遠州七窯とされる窯場で造られた茶碗のことである。しかし、残念ながら遠州の指導した茶碗の中には、重文指定はないようであるが、遠州の残した庭園や建築物には重文指定以上のものが幾らでもある。では、遠州は何故、七窯で始めとして、多方面に焼物の類を発注したかである。それは、遠州は好奇心が旺盛で、色々特色のある焼物を造らせなかったということであろう。それは、遠州が満足できる焼物ができなかったので、次第に発注先を拡大させざるを得なかったといえよう。最終的に遠州自身の満足できる茶碗を得られたかどうかであるが、利

休は茶会で満足しうる茶碗を何度も使用したし、織部は他に例をみない織部形の茶碗を残し、意に合った茶碗が存在していたといえよう。だが、師の織部の自刃後、事実上、遠州が武家茶道の中心的存在となっていく、それには遠州の焼物は、織部の否定を前提にしなければならなかった。それは、織部が徳川将軍の謀本人として処刑されたので、遠州は織部のすべてを尊敬しているが、徳川への遠慮からあえて排除したということである<sup>52</sup>。

つぎに、上田宗箇についてみてみよう。古田織部の茶道の弟子であった宗箇は、尾張（愛知県）星崎で永禄6年（1563）に誕生している。父は上田重光を名乗っていた。祖父・重氏の時、武田信玄との戦いで敗れ、織田信長を頼り尾張にやってきた。宗箇は幼名を亀丸といい、長じて重安を名乗ったが、12歳の頃、円羽長秀の待童として仕えた。以来、宗箇は10年余り長秀に従った。15歳頃から信長に仕え信長の代理を勤めるほどであった。安土築城の総奉行になり、本能寺の変後は秀吉に従い、越前（福井県）、加賀（石川県）二つを合せて120万石の領主となった。文禄の役が起るや宗箇は肥前（佐賀県と長崎県の一部）の名護屋の陣において、秀吉の警護の任についている。その後、明国の正使饗応の役目も果たしている。この時、古田織部と同席したことが、織部に師事する契機とされている。慶長5年（1600）、関ヶ原合戦が始まり、宗箇は西軍に組みした丹羽長秀の嫡子・長重が加賀・小松城で苦戦との報を受けた。これを救助せんと兵を率いて赴くも、小松城は落城し西軍は敗れ、宗箇も敗軍の将となる。失意の中にあつた宗箇を織部は茶会を催して慰めたが、これは織部の熱い友情を示すものであつた。後、大坂冬の陣が起つたが、この時宗箇は浅野長晟の傘下であり、先陣を切るなど戦いで、大いに浅野藩の名声を上げた。宗箇は大坂夏の陣の後、織部が家康から切腹を命じられるという事件に直面した。宗箇の織部を慕う気持ちは、紀州から芸州（安芸）・広島藩主として、浅野長晟が移封されるに伴ない具体化することになる。宗箇は広島へ長晟と共に移り、泉水館（縮景園）を造営する。また、和風堂という茶寮を造り、宗箇松を植えている。和風堂には織部灯籠と呼ばれる灯籠がある。この灯籠の竿の当る膨らみのある所には、是という文

字が刻印されている。字源は日と正との合字・匙の原字で、恐らく宗箇は茶道の師匠・織部をこの灯籠に偲んだもので、織部地藏尊と思われる<sup>53</sup>)。この織部灯籠は台座が省かれ直接に竿が地面に立てられている。このような形式は、正ちにキリシタン灯籠の影響といえないにしろ、きわめて個性的であるといえよう<sup>54</sup>)。個性とは「個体(個人)を他から区別する性質の全体」(前掲書『岩波小辞典心理第三版』、67ページ)である。

さて、古田織部であるが、織部は天文13年(1544)、美濃(岐阜県)本巢市山口の生れで、幼名は佐介、古田氏は応仁の乱までは、京都にあって、白河天皇の北面の武士であった。応仁の乱が10年も続いたため、美濃へ下向して権現山に筑城して土着した。古田氏は土岐氏に仕え、土岐頼芸が斎藤道三に滅ぼされると斎藤氏へ、次いで織田氏と主家を代えながら山口城主として継がれてきた。織部こと左介は17歳の時、信長のもとに仕官している。織部は小柄で信長のもとでは、大将の命令を受けて前戦に伝達する伝い番であった。織部は幼少年期を恵まれた自然環境で育ったし、青年期の精神形成は信長によるところ大である。信長の持っている革新性、科学性、合理性、経済性に加え、織部は創造性、芸術性をも持って安土・桃山時代の文化を創出することに成功した。織部は信長の口添えにより茨木(大阪)12万石の城主となり、それを機会に信長のもとを離れた。織部の才能の開花は、豊臣秀吉傘下で大名に列せられた時からである。この時期には戦国時代が終息して、平和が到来し経済は栄えた。生産効率の高い連房式登窯の登場などが、斬新的なデザインと共に相乗効果をもたらして、美濃焼が全盛期を迎えた<sup>55</sup>)。さらに、織部に関していえば、武士から町人まで色々な階層の人たちが自分を超えて、織部の茶を学び将軍秀吉までも茶法を伝授された。織部は天下一の宗匠と称されたが、時代は早やこのような人物を必要としなくなっていた。というより茶の湯で将軍家を凌駕する存在など許されなくなっていた。乱世的個性は平和な時代では否定される運命にあったのである<sup>56</sup>)。

では、織部はいつ頃から茶に関係を持ったのであろうか、周知のように織部の最初の主君は信長である。信長が本能寺に倒れた後、秀吉が天下統一し

て関白職につくが、この年織部は山城（京都）の領主となっている。織部が武人・茶人として、その名を天下に知られるようになったのは、この頃からであろう。それは、天正10年（1852）の利休の手紙に妙喜庵に同行しないかという観誘に織部の名があったからである。また、伏見（京都）・織部屋敷の茶事には徳川秀忠もしばしば出席しており、その後江戸に上り、秀忠に点茶の式を授けている。秀忠は織部を師と仰ぎ、自らの手で織部に円座を勧めたとされている。一介の土豪出身の織部が天下の茶湯名人として登用されたのは、如何にも戦国の世にあったことを如実に思い知らせてくれる。だが、時代は必ずしも織部に有利ではなく、利休七哲から織部を除外しようとするものもあった。だが、利休は常々茶の道は創意・工夫をすべきだと弟子に説いていた。そして、織部の茶は作意を強く打出し自由自在に変化のあるいわゆる織部好みと称されるものであった。その性格は利休好みの楽茶碗との差に大へんに驚かされる。つまり、ひょうげもの（ひん曲った歪）茶碗を使用した織部に対して軽蔑した。利休は作為とは人の真似であってはならないとして、織部の茶の生き方こそ、正に我意に適ったものであるとした。織部こそ近世の曙を生きた時代の寵児であったといえよう<sup>57)</sup>。織部茶碗の歪みの謎は幾つか考えられようが、その一は、利休を強く意識した結果でできたものである。その二は、禅の思想から生れたとするものである。それ以外に理由はあるだろうが、織部という人間が汪洋な人物だったことを考えれば、その二の理由の方がより真実に近いであろう。それは、意味なく無理やりに曲げたということではないはずである。織部茶碗は歪んだ中でも洗練さがあり、眺めていて変に感じなく、全体として調和が取れている。織部の指導下で厳しい審美眼を通った結果、世にでたとすると、そこには凡人には計り知れない美的感覚が働いているといえよう。ただ、むやみに曲げたとは到底思えず、織部茶碗を造った美濃の陶工たちの力量が素晴らしいものであったといわざるを得ないのである<sup>58)</sup>。

禅の思想とあるが、禅とは一体何かということになる。それは、神秘的経験ということであり、神秘的経験とは人の心の働きで、その心の働きには理

屈では説明できない経験のことである。その経験に力（精神）を集中するのが禅である。禅の基礎となるのは心理学といえよう。この心理的体験というところに禅の生命があり、それが禅の根本である。つまり、禅というものは論理に基礎を置くのではなく、心理（心）に基礎を置かねばならないのである<sup>59</sup>。そこで、禅を定義してみると「思いをしずめ、心を明かにして、対象に注意力を集中し、正しい理に達すること。心をしずめて無我で煩惱（ぼんのう）を離れ、苦を滅し解脱（げだつ）の境地に没入すること」（『広辞林〈第六版〉』、1129ページ）となっている。禅をベースとした織部は、師である利休とは異なった美意識を茶の湯に持ち込んだのである。この時代の茶の湯は師と同じようなことをするのではなく新たな作為をし、自己の茶を創造することが重視されたからでもある。たとえば、茶室でも織部の茶室は利休の茶室とは異なりより広く、窓が増加して明るく、緊張感というより余裕と寛ぎを与えるものとなっている。織部の茶の湯は利休のものとは正反対であったが織部は心の底から利休を慕い、秀吉から利休が蟄居を命ぜられて、堺へ送還された時、三斎と共に織部は密かに見送ったのである<sup>60</sup>。「聚楽第を出て淀川を下る利休を見送ったのは秀吉を慮ってか、たったの2人。その1人が吉田織部だった。約2週間後、千利休は自刃。見送りのお礼にと、『泪』と名付けられる茶杓が、織部に形見として贈られ」（『おりべくらぶ』、4～5ページ）ている。

かくして、古田織部の弟子に遠州流茶道の祖・小堀遠州、上田流茶道の祖・上田宗箇、徳川二代将軍・徳川秀忠などがいる。遠州は織部とは異なる独自の茶道観を示した。宗箇は織部の死後、師を慕う気持から織部灯籠（地藏尊）を建て偲んだ、秀忠は織部を師と仰ぎ円座を勧めたとされている。その織部は師である利休とは異なる美意識を茶の湯の中に持ち込んだ人物である。

#### 4. 茶の湯の茶碗

##### (1) 茶碗の内容

飲食器としての茶碗（碗：椀）は皿と共に代表的な器種で、飯や汁物を入れ

る、また茶を飲むために使用される。最初、碗は木製の椀であったが、焼物が多くなると碗の字が使用された。また、茶を飲む碗は茶碗と呼称されるようになる。茶碗が一般化すると飲用のもの（茶碗）は飯茶碗と呼ばれ、茶を飲むものは茶飲茶碗となった。今は茶碗という用語が通常使用されている。茶の湯では床間の飾りなど重視されているが、「床の間の起源は、14世紀のある僧呂の家の仏間であったといわれている」（前掲書『日本文化を英語で説明する辞典』、307ページ）。実際に手に取って茶を飲む茶碗が最も重要な道具である。茶人の美意識により独特の茶碗の分類と観賞方法が生れている。このような茶碗を産地で分けると中国産の唐物（陶磁器）、朝鮮産の高麗（陶磁器）、日本産の和物（陶磁器）となる（『日本史小百科〈陶磁〉』、72ページ）。日本へは栄西が茶を喫する器を宋から持ち帰ったとされている。それは、天目茶碗であり珠光青磁と呼称されるものであったであろう。喫茶の習慣は禅門の僧侶に始まり、次第に貴族階級などへと移行し、さらに民間へと拡大していった。この時代にすでに茶陶が出現していると思われる。室町時代になると中国からの茶碗が需要に追い付かず、国内の美濃などに注文して作製された。これが和物茶碗の発生である。茶陶もこれまでとは違って、楽をはじめ志野、織部、黄瀬戸など美濃のもの、信楽のもの、備前のもなど国内で焼かれたものが全盛を極めた。古田織部などの芸術家が登場するに従って、茶陶もこれらの影響を受け、日本独特のものへと成長していった。各藩の大名は独自に茶道を嗜み、邸内に窯を、また殖産政策を兼ねて藩窯を興すなど茶陶も多岐にわたった。しかし、明治維新になると藩窯は藩の援助もなくなり、自然と消窯したり、民営に移ったりした。茶陶は時代変遷を繰り返し、現在に生きづいている<sup>61</sup>。江戸時代になってからの織部茶陶は、デザイン化、パターン化が進み、絵付や造形も様になっていくが、これら茶陶には、力強いエネルギーが宿っている。桃山時代特有の創意に満ちた気風も伺える。正に日本一の織部と呼称してもよからう。たとえば、「織部菊文茶碗」（茶陶）をみると、頑丈そうな高台、茶碗の背面・側面・正面に菊らしき草花の折枝文は、実にプリミティブタッチで、とくに花卉に当る部分は、意識的に描こうとし

て描いたのか無意識的に描こうとしたのか、時たま滲んでしまったのではないかと思われるような絵で現代人には決して描けない景色である<sup>62)</sup>。景色というのは、自然の風景のみでなく、茶器の様々な釉の色である。陶器の焼加減や火加減によって、様々な色が出現する。このような色、茶器の下釉、上釉などの色の変化、このようなものを景色と称している<sup>63)</sup>。

さて、中国で飲む器（抹茶）として使用され、日本に伝来した茶碗は、一般に天目茶碗であった。しかし、それ以前、日本では煮茶用の飲用に使用されていた青磁の茶碗でも茶は飲まれていた。このように天目茶碗に拘泥しなかったところに、その後の日本の茶碗・茶陶の展開があったといえよう。陶器といえば茶碗というほどであったが、茶碗として珍重された陶磁器の総称として、高麗茶碗が用いられるようになった。だが、それらは施釉陶器であった。表面がガラス質の釉薬が掛っていて、唇を触れた時の感触がよかったのである。無釉の備前焼、信楽焼など和物は一般に水指や花入、建水に使用されている<sup>64)</sup>。まず、備前焼であるが、備前焼の源流は須恵器まで遡るが、須恵器は備前地方でも6世紀初めには焼成されていた。だが、平安時代には朝廷の勢力の衰えにより貢納が減少すると次第に衰退した。当時、伊部地方（熊山）は原土や燃料の赤松に恵まれ、鎌倉時代初期には祭祀用具や日常雑器、瓦を焼成していたが、未だ須恵器と同様な色合いであった。鎌倉時代中期から後期にかけて、赤複色で須恵器とは異なる新しい焼物、つまり備前焼が生れた。室町時代初期にかけて需要が増大、中期には製品搬出を考えて、工人たちは熊山から麓に下りて、大窯を構築した。それによる大量生産された製品は、西日本各地に運ばれ、著しい発展を遂げたのである。室町時代後期から侘茶が流行すると壺などの日常雑器が茶道具として取り上げられ、桃山時代には茶人の受注により窯変の味わいのある花入、水指などが焼成されるようになった。江戸時代には白備前、青備前、色絵備前など特殊なものも焼かれたが、一時的なものでその後は磁器に押され低迷した<sup>65)</sup>。ついで、信楽焼であるが、信楽焼は信楽町（甲賀市）で生産される陶器で、陶土の特性を生かした製品が多く、焼成時に炎や灰により作られる灰色、ピロード、焦げと



称される独特の色や素朴な土の風合などが特徴である。初めは鉢・甕など生産していたが、室町時代末期に茶の湯が流行すると、素朴な風合が人気を集め、茶陶の窯として認められるようになった。信楽焼も人々の生活様式に合わせ、時代と共に変化して、江戸時代には急須、徳利、明治時代には火鉢、植木鉢が生産された。現在はその種類は多岐にわたり、信楽焼といえば狸の置物が有名となっているが、生産されるようになったのは、昭和時代になってからである<sup>66)</sup>。

周知の通り、茶の湯といえば喫茶であるが、喫茶を広めたのは栄西であり、毎年・栄西の誕生日に催される茶会では、客に抹茶を入れた天目茶碗が配られ、それに湯を注ぎ入れ、茶をたてていくのである。最初、茶は嗜好品ではなく薬として扱われ、時代を経るにつれて、僧侶や上流貴族の間で嗜なまれた。そして、風雅な好む文化の間にも茶の湯が広まり定着していった。また、前述した闘茶が武士の間に盛大に行なわれ社交の場となり、茶の普及に拍車をかけた。派手な振る舞いから婆娑羅大名と呼称された佐々木道誉も何度も闘茶会を催した。派手という言葉は「色、デザイン、性格、行動などさまざまなもの描写するのに用いる」（前掲書『日本文化を英語で説明する辞典』、69ページ）。茶は当時薬として用いられた貴重品を僧侶や近隣の人たちと飲んだのであり、西大寺の大茶盛などは民衆喫茶の始まりである。15世紀初、神社、寺院門前に庶民向けの茶店（茶屋）が現われるようになった。お参りを済ませた人々は、一服一銭で茶を楽しんだ。初期の茶屋は担い売りや露店のようなものだった。蓮如上人の頃になると、地域の門弟を集めた講などの折には、喫茶の風習が定着したらしい。蓮如は寺に茶所を設け参詣人に茶を振舞ったり、本願寺の仏法聴門に集った人々に茶の接待をしたという<sup>67)</sup>。蓮如は、応永22年（1415）2月25日、存如上人の長男として京都東山大谷で誕生した。生母は本願寺で奉公していた女性と伝えられているが、存如の正妻ではなかった。生母は蓮如6歳の時、大谷の地を去っていた。その後、如円尼が存如の正妻として迎えられたが、蓮如との関係は良好ではなかった。蓮如一家の生活は経済状態の困窮で厳しいものがあつた。存如が没すると、如円尼

は実子の応玄を立てて本願寺の組織を主張した。だが、蓮如の叔父である如乗の助力もあって、蓮如は本願寺等第八代を継職することになり、精力的な独自の布教活動をした。それにより、本願寺は大きく伸展し、近江を中心に強固な門徒団が形成されるに至った<sup>68)</sup>。

ところで、朝鮮では庶民である農民が日常生活で用いている茶碗の中から茶の湯に合う茶碗を選んで使用している。これらは高麗茶碗といい、多くは季朝時代に焼かれた製品である。日本では茶の湯のために、とくに注文して高麗茶碗が生れるが、それは貴重な茶陶として使用されている。これらの茶碗に代って和物が主流となるのは、桃山時代からである。桃山時代には多くの和物茶碗が登場する。志野、織部、黄瀬戸、あるいは楽焼、長次郎、さらに唐津、高取、上野、萩など代表的である（前掲書『日本史小百科〈陶磁〉』、73ページ）。まず、楽焼（茶碗）であるが、楽茶碗は利休が茶の流行と共に茶碗の不足を嘆き、やっとな工・長次郎を得て、造り上げた茶碗であり、利休の侘茶の精神が最も濃厚に示された造形ということができる。初代・長次郎は無印で初めて印が押されるのは田中宗慶からである。宗慶は初代・長次郎没後、その仕事を継承し、秀吉から金印を受けている。次いで、その次子・常慶は秀忠から銀印を受けている。だが、代々で茶碗に印を押さない人もいる。この場合、作風や箱書きで作者を見分ける方法しかない。また、楽茶碗は赤と黒の二色しかないが、赤と黒いずれが上ということはなく、一般に渋み重厚みを重ずる場合は黒が親しみ、華やかさを求める場合は赤が好まれている<sup>69)</sup>。楽茶碗の魅力は、利休の意を受けた長次郎の手捏ねで創出していることである。楽茶碗は他の国焼茶碗とは異なっているようである。楽茶碗は美意識を根幹から具体的な制作技法に至るまで、そのプロセスは徹底して意識化されている。桃山の個性ともういうべき美の数々をことごとく削ぎ落した負の方向への徹底した意識化である。美濃を筆頭に国焼が轆轤によって作られるのに対し、楽茶碗は手捏ねで作られている。当時、手捏による制作は一部のかわけ類を除き他になかった。楽茶碗の柔らかな丸味を帯びた姿は、手捏ねの過程で生まれる自然な形であり、それは手の姿である。柔らかな手

の動きが土に命を与え、茶碗の姿に生れ変わらせるのである<sup>70)</sup>。

次いで、唐津焼であるが、唐津焼は現在、唐津市と近郊で焼成されているが、元は肥前一帯で焼成されていた。唐津焼は有田焼よりも古い歴史を持っており、岸岳諸窯を中心に広く製陶が実施されていた。岸岳は松浦党の領袖である波多氏の居城があった所で、早くから朝鮮、中国から窯業技術を導入して焼物づくりをしていた。だが、文録・慶長の役の後、波多氏は秀吉に滅ぼされ、代わりに寺沢氏が新領主となり、唐津領内に窯を築き、陶業を保護、奨励した。元からいた陶工、新たに渡来した陶工たちが一緒になって、藩の御用品、茶器などの上手物や日常用器を焼成し、今日のような唐津焼を誕生させた。製品は唐津港から出荷され、西日本一帯に流布し、東日本のせとものに対し、からつものと呼称された。唐津焼は渋い土味と素朴な鉄絵、藁灰釉の黒釉の掛け分けなどのゆったりした野趣に富む味わいにあるのが魅力的である<sup>71)</sup>。さらに、萩焼であるが朝鮮に出兵し、この時萩の武将毛利輝元が、朝鮮から連れ帰った兄弟陶工・李勺光と敬、二人が萩（松本）の地に窯を開き、これが萩焼の始祖となった。初めは高麗茶碗など季朝風の作品が主体的であったが、時代を経るにつれて、楽焼等の影響により独自のデザイン、作風が確立する。萩焼は茶人には馴染み深い焼物である。その特徴の一つは、焼締めが弱いと、肌に入るといひび割れができる。そのため吸水性が高く、このひび割れに茶が染め込んで器の色が微妙に変化する。俗に萩の七化け、茶櫃れと称されるもので、使えば使うほど柔かく温もりのある赤味掛った器肌になる。特徴の二つは、絵付け、装飾が少なく侘茶の精神を旨とする茶の湯では、萩焼の飽きのこない枯れた風情が観迎された。装飾性の少ないかわりに、蹴轆轡を使用した造形、土の配合、釉薬の変化、篋めの面白さなどで変化をだす。特徴の三つは、高台に切れ込みのある割り高台を作っている<sup>72)</sup>。

かくして、織部の茶の湯道具・茶陶には、現代人には決して描けないものがあり、力強いエネルギーが宿っている。織部茶碗（茶陶）には、中世から近世への過度期にあった桃山時代特有の創意・工夫が満ちた気風が伺え、正

に日本一の織部（茶陶）と称されよう。

## (2) 美濃焼の茶陶

桃山時代というのは、豊臣秀吉が天下の覇権を把握してから歿するまでの16年間だが、文化的にいうと信長が政権を取った安土時代を含めた、安土・桃山時代と解されている。また、俗に寛永の鎖国までの元和年間をも含めた前後50年間を桃山時代と称している。日本陶磁史でいう桃山時代と、この広義の意味で桃山時代と呼ぶこともある。桃山時代は政治、経済、文化全般に大変革のあった時代だが、焼物もその作風にかけてない大きい変化が起こり、日本陶磁器の黄金時代とされている。自由で変化に富み、最も日本的な特質が現われた焼物が焼かれたのが、桃山時代である。また、武人・農民・町人の三階級の区別が明確にされ、武人（武士）が絶対的な権力を掌握した時代でもある。諸大名は競って大きな城を築き、また書院造りの宮殿や邸がそこそこに造営された。それらの建築を飾るために、永徳・山楽などの画家が活躍して、桃山障壁画と称される豪華絢爛な絵画様式が誕生した。調度品でも工芸品でも桃山文化独特の華やかな様式が生れたが、中でも茶の湯の流行は、この時代の大きな一つの特徴であった。時代を反映して、桃山時代の焼物は豪壮で自由奔放なものが多く、桃山時代は茶器（茶碗など）全盛の時代だったといえる。桃山時代の焼物は明るく、華やかで変化があった。日本の焼物で桃山時代の焼物、とくに美濃焼は器形、文様に変化があり、澁刺として生気に満ちている。また、茶陶は暖かく柔か味のある日本的な感じのする焼物である。桃山時代に日本の製陶の中心地だった美濃は美濃の豪族土岐氏の手厚い保護があった。初代の美濃の守護・土岐頼貞は文武に優れた名将で、夢窓国師に帰依して虎渓山永保寺を建てた<sup>73)</sup>。永保寺の正式名称は、臨濟宗南禅寺派虎渓山永保寺で、虎渓山北の土岐川河畔に広がる古刹である。鎌倉時代末期の夢想国師が開祖となり、仏徳禅師を開山として創建した。国宝観音堂、国宝開山堂があり、自然の岩山を背景に心字池を配する庭園は国の名勝に指定されている。また、四季折々の景色は格別である（『多治見もの

がたり』、3ページ)。

先にみたように、桃山時代は自由で大らかな文化が展開されたようだが、文化とは何かそれはかなり難しい問題である。文化を民族や国家や宗教などを基準にして分類することもできるし、人類全体を一つの文化とみることもできる。また、文化は目立表側の部分と目立たない裏側の部分というように分類することもできる。裏側の部分は各々の文化の基礎となっているとされるので基層文化、表側の部分を上層文化と称することもある。基層文化は国家等の特徴づけているもの、その上に立つのが上層文化で、芸術や社会といったものであるといえよう。上層文化には芸術文化や社会文化とがある。芸術文化：絵画、彫刻、建築、工芸、芸能、映画、演劇、舞踊、文学、音楽等。社会文化：政治、経済、教育、スポーツ、武道等。基層文化には、生活文化や宗教文化がある。生活文化：衣、食、住、遊興、行動等。宗教文化：思想、儀式、習慣等。だが、実際には様々に複雑にからみあっており、境界を定めることは困難である<sup>74)</sup>。桃山時代（文化）に美濃で焼かれた茶人愛好の茶陶（茶碗）である。まず、黄瀬戸：淡黄色の釉を掛けた焼物をさし、灰釉が基礎となっている。灰に長石を混合した土灰釉、朽葉色、薄い灰色が掛る緑色に発色する釉である。一般に光沢が鈍く、ざらざらした感じの釉が高く評価され、茶人はあやめ手、あぶら手と呼称して愛好した。素地は細かな粘土を用い、轆轤で薄く引いている。文様は全体に粗い簡素なものが多く、線描した後、酸化銅呈色の緑釉や鉄釉を斑状に散らし掛けする場合がある。鉄釉で細い線を簡単に描いたものは、緑色と黒褐色の対比は美しい。これらは地元の需要で焼成したものではなく、京都を中心とする都市へ多く販売されている。次いで、瀬戸黒であるが、窯内で赤く焼成している折に窯から引出すので引出し黒、天正年間頃から焼成されたので天正黒とも呼称されている。室外で完成するので黒釉は色々な発色を示している。釉は灰に鉄分を多く含んだ鬼板を混ぜた鉄釉である。室内温度が1100度程度に上昇した頃、焼成途中で室内より引出し、急冷して黒色とする。また、引出す折に使用した鉄の挟みの形跡が茶碗に残存し、それは茶人の好む景色の一つとなっている。

単純で力強い感じの筒形碗が多く、高台が小さく低いのが一般で、茶筒として愛好されている（前掲書『日本史小百科〈陶磁〉』、186～187ページ）。

瀬戸黒は元来、色見であったとされるが、明らかに茶陶として完成しているものもある。茶陶を意識せずに造られた。いかにも茶碗として使い難くそう、形も洗練されていない粗雑な感じのするものもある。高台などは実に単純に削りだしてある。だが、茶陶というものを十分意識して造ったものは、茶人に売込もうという意図も伺える。明らかに意識の変革があったといえよう。その変革の根本的な原因が、千利休や古田織部による茶の湯界の変革である。とくに、利休でなく、織部を意識した影響が色濃く推測され、織部の影響が大きかったといえよう<sup>75)</sup>。一般に織部という用語は一種の美濃焼である緑色の釉調のものを示すことが多い。だが、古田織部のいわゆる織部好みの点からすると、美濃陶全部、すなわち志野、黄瀬戸、瀬戸黒、織部もすべて織部ということもいえよう。緑色釉を狭い意味で織部と呼ぶこともあり、さらに古田織部その人も織部である。それ故、織部という用語は様々に使用されている<sup>76)</sup>。織部の名を高くしている一つの理由として、茶陶の存在がある。周知のように、織部焼は斬新なデザインに特徴を有する茶陶で、従来のものに比較して、如何にも自由潤達な雰囲気醸しだすものであった。利休亡き後、武家相応の新たな茶の湯の型を創生しなければならなかった時期に、さっそうと織部が登場した。そして、時を同じくして、美濃の新たな焼物が出現し、流行したのである。まず、青織部という分類（茶碗）が最初に現れるが、その後黒織部、織部黒、赤織部、鳴海織部など現れてくる。だが、明確な分類がなされるのは、長い年月を経てからである。織部を焼いて窯として、土岐市の元屋敷に連房式登場が導入され、飛躍的に生産と増加した。だが、美濃で焼成された織部焼は、短サイクルでデザインを変化させたので、30年間で終りを告げている。短期間で大量に焼成された織部焼は、京都、大阪の大消費地に出荷された。それには好みの動向（欲求）を適確に把握したり、輸送ルート（物流）の確保などが前提となる。しかし、それについて古田織部が関与したと思われるが、武将によって創案されただけ

に、その愛容範囲は限定されたものであった<sup>77)</sup>。欲求の適確な把握とあるが、「欲求 (needs) とは人間が感じる欠乏状態であり、人間の特定行動を特定の方向に導く主体的条件である」(前掲書『基本流通用語辞典』、292ページ)。

この時代に作られた斬新な造形と豊かな色彩の焼物は、日本陶磁史の中でも特筆すべき画期的なものであった。油揚肌の黄瀬戸、漆黒の瀬戸黒、清楚な志野、そして斬新なデザインの緑の織部といった新しい焼物が、茶の湯の流行を背景に次々と生まれた。武将茶人の古田織部の好みで造られた織部焼は、思切った発想と変化に富んだ造形、鮮やかな緑色と鉄絵による斬新な奇抜なデザインで、いわゆる当時の前衛陶芸であった<sup>78)</sup>。織部は武人としての自分の個性にマッチした趣味嗜好を強く押しだした個性的なスタイルを茶器に持ち込もうとした。つまり、茶の湯の個性化と呼称してもよからう。織部は躍動するような美しさに彩られ、大胆不敵とも思えるほどのデフォルトされたデザイン、そして華美な色彩の横溢した茶器を好んだのである。また、織部は最初からひびや歪みや壊れかけているかの如き形を与え、芸術的作品にまで高めようとした茶器。そこには利休の侘びの理想ともいえる素朴な自然はなく、いわば創られた侘び、意図的な侘びがあったとえよう<sup>79)</sup>。侘び(わび)とは「素朴な美と人生に対する超越的な態度に価値を」発見することである(前掲書『日本文化を英語で説明する辞典』、343ページ)。織部焼の種類についてまとめると、青織部：器の一部に酸化銅が掛けられ、余白に当る所に文様が描かれている。絵織部：器全体に緑釉を掛け、その釉下に釘や篋で文様を彫刻したものである。鉄織部：鉄絵で白地に文様を描いたもので緑釉のないものを指している。鳴海織部：鳴海手と称されるもので、緑釉の掛ける方を白土とし、余白部分を赤土で継合わせるものである。伊賀織部：造形は破格と呼ばんばかりに大胆に異様な感じがする。唐津織部：唐津との技術交流は結果的に唐津風の織部を生むことになった。織部黒：黒一色で文様はない。黒釉を全体に掛けて、焼成中の窯から引出し急冷させる。思い切って変形させた形状を持たせており、これが杓形茶碗と称されるものである。黒織部：黒釉を一部分に施釉せず、窓と称する空間を残しておき、そこに鉄絵を描い

ていく、それには抽象文様が多く、これが斬新的と呼ばれている。赤織部：赤土のみで白化粧土と鉄絵により、文様を描いているなどのようになる<sup>80)</sup>。

赤織部は、特徴として色彩と意匠の面白さが際立っていることである。一般的に茶陶の姿：黒織部の豪放さとは異なり、杳形もよく纏っていて上品な美しさを感じさせる。織部釉：赤土を主体的に使用し、それに釉を掛けて、さらに赤味を強めている。口辺から掛けられた織部釉は見事な発色をみせ、さらに釉際で大粒状の溜りをみせている。文様：白釉と鉄釉で描かれた絵が極めて斬新的である。たとえば、初期の織部の名作の織部の「茶陶わらや」は、杳形中では出色の存在である。わらやの銘は、茶の湯の極意を教えるものとして、侘びの極意は藁屋に名馬を継ぎ留めたようなものという珠光の言葉を借用して、千元伯によって名付けられたものである。茶陶の姿：杳形の造形にも色々あるが、一般には赤織部より黒織部の方がスケールが大きく、如何にも武将好みである。口辺：不正形に歪み、大きく山路をなしている。土味：初期の織部らしく土味は柔らかい。文様：黒釉の掛ってない部分には堅縞の中に幾何学模様が、自由自在に描かれており、織部のモダンな装飾が伺われる<sup>81)</sup>。また、織部茶陶の銘「冬枯」をみると、銘冬枯はこれを案山子と見立てたのか、木の葉模様と見立てたのか、それとも枯野のような茶碗の膚の調子からの命銘なのか、まるでアフリカン・アートを思わせるような不思議な絵である<sup>82)</sup>。さらに、志野であるが志野の名の由来をみると、室町時代中期、足利義政の近侍であった志野宗信は、後に志野流香道の祖となったが、茶道にも見識が深かった。その志野宗信が陶工に注文して焼成させたのが志野とされている。また一説に、土岐伊予守に仕えていた城宗真という人が、茶入れに篠（しの）という銘を付けたことから志野が始まったとされている<sup>83)</sup>。その志野は、美濃窯で焼成された長石釉単味に近い釉を掛けた白色の陶器を指している。器面の装飾や色合いによって、次のように分類される。無地志野：長石釉のみで、模様のない無地の志野をいっている。素地には白土を使用しているが、わずかに含まれる鉄分で口縁部、釉際などの釉の薄い部分に赤色が現われる。絵志野：鉄絵が素地に描かれた志野で、その上に長石



釉を掛けている。白色不透明釉の中に、茶色や黒褐色の模様が現われる。練上志野：練志野とか練込志野ともいい、素地に白土と赤土の混合を使用する。白土は一般の志野の素地であるが、赤土は鉄分の多い陶土を用いている。鼠志野：素地に鉄化粧を施し、篋などで掻き落として、模様を描き、その上に長石釉を厚く掛けたものである。掻き落した部分は白色になる。赤志野：長石釉を薄く掛けるため、鉄釉部分が濃く赤くみえる。紅志野：素地に薄く黄土を塗って下地とし、その上に鉄絵を描き、全体を長石釉で覆ったものである。淡い火色の地の上に、素朴な鉄絵模様が現われる。窯詰にはどれも匣鉢に一点ずつ入れて丁寧焼成する。多くの製品の中で無地の志野が最も大量に造られている（前掲書『日本史小百科〈陶磁〉』、184～185ページ）。完成した志野茶碗と利休形の長次郎の楽茶碗を比べてみると、楽茶碗がいかにも無表情で、無味の味、無感の感を宿しているのに対し、志野茶碗はいかにも明るく楽しく、面白い工夫がしてあり、多くの茶人への接近を図っている。大量に生産される志野茶碗は明らかに、ファッショナブルな茶人の動静を映している。織部はこのようにして茶人の心を把握したのである<sup>84)</sup>。

かくして、桃山時代は政治、経済、文化全般に大変革の時代だが、焼物も作品の傾向や特徴もかってない大きな変化が生じ、日本陶磁器の最も繁栄した黄金時代とされる。自由で変化に富み、最も日本的な特質が現れた焼物が焼成された時代（文化）である。武人（武士）が絶対的な権力を持っていた時代であり、織部は武人として個性にマッチした趣味・嗜好を強く押し出し、个性的な様式を茶陶に持込んだもので、茶の湯の個性化と称されよう。ひょうげもの、恐れを知らない大胆不敵とも思われるほどの省略された意匠等、いわゆる織部好みと呼ばれた。

## むすび

信長は天下人に欠かせぬものは茶の湯であるとして、天下人と茶の湯を結びつけた。茶の湯に用いる茶はツバキ属に分類され、常緑広葉樹の一種で、茶の生葉を収穫し、この茶葉を原料として茶を生産する。茶の原産地はイン

ドと中国とされるが、日本への茶の流入は中国となっている。なお、茶は日本の自生説もあるが、中国からの渡來說が通説である。茶の種（茶種）を中国から持ち帰ったのは栄西で、栄西は九州の平戸島浦に到着し、持ち帰った茶種を最初、筑前（福岡県）の背振山の靈仙寺の西ヶ谷と石上坊に蒔いた。その10数年後、梶屋の明恵に茶種を贈っており、この地が茶の生産地で、梶屋の茶の起源となっている。その後、明恵は適地を探し求め宇治に茶園を開いた。茶葉を用いて、湯を沸かして茶をたてて飲むこと、これが茶の湯である。その茶の湯は日常生活そのものの基盤となっている。そして、生活する家に茶の湯の芸術を導入すると共に、新たな美の世界を築いたのである。しかも、茶の湯の精神は宗教（禪）の儀式のように、食べる・飲むことを聖なるものとして、人間の生活そのものを生活文化＝芸術化したのである。禅宗では修行の一環として茶の栽培・製造を行なっている。嵯峨天皇が近江（滋賀県）への行幸の際、途中で禅宗の寺、梵釈寺で周辺を茶園にしていた大僧都・永忠の茶を飲まれた。その後、天皇は諸国に茶の栽培を推め、茶を献上するよう勅命をだすと共に喫茶法を伝えている。鎌倉・室町時代にかけて喫茶が盛んとなり闘茶の会まで生成している。茶の湯（茶道）の元祖は侘びの茶境を開拓した村田珠光である。茶の湯は親睦の場であり、寄り合いの場でもあった。さらに、侘びの境地を深めたのは武野紹鷗で、茶の湯の大成者で天下一の宗匠となった千利休は、北野道陳に学んだ後、紹鷗に師事した。利休は多くの門弟を持っていたが、代表的な門弟として、蒲生氏郷、高山右近、細川三斎、芝山監物、瀬田掃部、牧村兵部、古田織部の利休七哲と称される人たちがいる。だが、順位七番目という最下位の古田織部が利休の後継者として、とくに武家（大名）茶道の確立に尽力し、茶の湯名人（天下一の宗匠）となった。そ織部の弟子に遠州流茶道の祖・小堀遠州、上田流茶道の祖・上田宗箇、徳川二代将軍・秀忠などがある。遠州は織部とは異なる独自の茶道観を示した。宗箇は織部の死後、師を慕う気持から織部灯籠（地蔵尊）を建て偲んだ。秀忠は織部を師と仰ぎ円座を勧めたとされている。そして、織部は秀忠に点茶の式を授けている。その織部は師である利休とは異なる美意識

を茶の湯の中に持込んだ人物でもある。また、織部の茶の湯道具・茶陶には、現代人には決して描けないものがあり、力強いエネルギーが宿っている。織部茶碗（茶陶）には、中世から近世への過度期にあった桃山時代特有の創意が満ちた気風が伺え、正に日本一の織部（茶陶）と称されよう。桃山時代は政治・経済・文化全般に大変革の時代だが、焼物の作風もかつてない大きな変化が生じ、日本陶磁器の最盛期である黄金時代とされている。自由で変化に富み、最も日本的な特質が現われた焼物が焼成された時代（文化）である。武人（武士）が絶対的な強制力を掌握した時代であり、織部は武人として個性に適した趣味・嗜好を強く前面に打出し、個性的なスタイルを茶陶に持込んだ。つまり、茶の湯のパーソナリー化などと呼称してもよからう。ひょうげもの、大胆不敵と思われるほどのデフォルメされたデザインは、織部好みと呼ばれたのである。

## 注

- 1) H. Plutschow, *The Japanese Tea Ceremony, As A Political Ritual*, 2010. H. プルチョウ著、篠田綾子訳『茶道と天下統一』（ニッポンの政治文化と「茶の湯」）日本経済新聞出版社、2010年、86～89ページ。
- 2) 小泊重洋「茶の科学」茶の湯文化学会編『講座日本茶の湯全史』（第3巻近代）思文閣出版、2013年、226～227ページ。
- 3) 久野治著『千利休より古田織部へ』鳥影社、2006年、10～11ページ。
- 4) 栗原久著『カフェインの科学—コーヒー、茶、チョコレートの薬理作用』学会出版センター、2004年、31～32ページ。
- 5) 松下智著『幻のヤマチャ紀行』（日本茶ルーツを探る）淡交社、1999年、234～237ページ。
- 6) 小泊重洋「茶の科学」茶の湯文化学会編著、前掲書（『講座日本の湯全史』（第3巻近代））、227～233ページ。
- 7) 神津朝夫著『茶の湯の歴史』角川学芸出版、2000年、30～31ページ。
- 8) 小田榮一監修『抹茶と茶器』（これだけは知っておきたい棗と茶入れの名品選）世界文化社、2000年、18ページ。
- 9) 栗原久著、前掲書（『カフェインの科学—コーヒー、茶、チョコレートの薬理作用』）、

- 31ページ。
- 10) 神津朝夫著、前掲書（『茶の湯の歴史』）、19～20ページ。
  - 11) 玉川和子著『茶懐石と健康』（一汁三彩の知恵）淡交社、2003年、14～15ページ。
  - 12) 寺田孝重「日本茶業史」茶の湯文化学会編著『講座日本茶の湯全史』（第1巻中世）思文閣出版、2013年、239～243ページ。
  - 13) 小田榮一監修、前掲書（『抹茶と茶器』〈これだけは知っておきたい棗と茶入れの名品選〉）、20ページ。
  - 14) 井上辰雄著『茶道をめぐる歴史散歩』遊子館、2009年、34～35ページ。
  - 15) 松尾剛次著『「お坊さん」の日本史』日本放送出版協会、2002年、92ページ。
  - 16) 小川後楽著『茶の文化史〈喫茶のはじまりから煎茶へ〉』（NHK 人間講座）日本放送出版協会、2002年、86～88ページ。
  - 17) 小田榮一監修、前掲書（『抹茶と茶器』〈これだけは知っておきたい棗と茶入れの名品選〉）、20～21ページ。
  - 18) 京都造形芸術大学編著『茶の湯を学ぶ』（もてなしの芸術の歴史と美）角川書店、1999年、8～9ページ。
  - 19) 宮家準「儀礼と世界観―生業を中心として」上田閑照、柳川啓一編『宗教学のすすめ』筑摩書房、1985年、60～61ページ。
  - 20) W.R. Comstock, Religion & Man: *The Study of Religion & Primitive Religions*, Harper & Row, Publishers, Inc., 1972. W.R. コムストック、柳川啓一監訳『宗教』（原始形態と理論）東京大学出版会、1986年、38～44ページ。
  - 21) 神津朝夫著『茶の湯と日本文化』（飲食・道具・空間・思想から）淡交社、2012年、201～203ページ。
  - 22) 神津朝夫著『茶の湯の歴史』角川学芸出版、2009年、252～254ページ。
  - 23) 京都造形芸術大学編著、前掲書（『茶の湯を学ぶ』〈もてなしの芸術の歴史と美〉）、9～10ページ。
  - 24) 小川後楽著、前掲書（『茶の文化』〈喫茶のはじまりから煎茶へ〉）、78～79ページ。
  - 25) 宇高政光著『お茶は世界をかけめぐる』筑摩書房、2006年、49ページ。
  - 26) 神津朝夫著、前掲書（『茶の湯の歴史』）、42～47ページ。
  - 27) 宮坂宥勝著『空海』（生涯と思想）筑摩書房、2003年、76～77ページ。
  - 28) 松尾剛次著、前掲書（『「お坊さん」の日本史』）、52～63ページ。
  - 29) 京都造形芸術大学編著、前掲書（『茶の湯を学ぶ』〈もてなしの芸術の歴史と美〉）、32～33ページ。

- 30) 小山茂樹著『茶壺に追われて』（ほっこり宇治茶のこぼればなし）淡交社、2009年、10～11ページ。
- 31) 久野治著、前掲書（『千利休より古田織部へ』）、16～18ページ。
- 32) 井上辰雄著、前掲書（『茶道をめぐる歴史散歩』）、68～69ページ。
- 33) 木村宗慎「政商の末路～千利休とその時代」楽吉左衛門、川瀬敏郎、木村宗慎著『茶碗と茶室』（茶の湯に未来はあるか）新潮社、2012年、59～61ページ。
- 34) 京都造形芸術大学編著、前掲書（『茶の湯を学ぶ』〈もてなしの芸術の歴史と美〉）、35～36ページ。
- 35) 神津朝夫著、前掲書（『茶の湯の歴史』）、162～164ページ。
- 36) 桑田忠親著、小和田哲男監修『戦国武将と茶の湯』宮帯出版社、2013年、180～181ページ。
- 37) 京都造形芸術大学編著、前掲書（『茶の湯を学ぶ』〈もてなしの芸術の歴史と美〉）、41～42ページ。
- 38) 筒井紘一著『新島八重の茶事記』小学館、2013年、95～98ページ。
- 39) 久野治著『改訂古田織部とその周辺』鳥影社、2009年、147～148ページ。
- 40) 井上辰雄著、前掲書（『茶道をめぐる歴史散歩』）、84～85ページ。
- 41) 筒井紘一「利休とその門弟たち」納屋嘉人編集発行『利休と七哲—それぞれの茶風を知る』（淡交第61号）淡交社、2012年、7～8ページ。
- 42) 谷端昭夫著『よくわかる茶道の歴史』淡交社、2012年、126ページ。
- 43) 同上書、127～128ページ。
- 44) 久野治著、前掲書（『千利休より古田織部へ』）、32～35ページ。
- 45) 編集部編「ルポ七哲ゆかりの地を訪ねて in 会津若松」納屋嘉人編集発行、前掲書（『利休と七哲—それぞれの茶風を知る』〈淡交第61号〉）、81～83ページ。
- 46) 河野逸人編集『八重の桜 〈前編〉』（NHK 大河ドラマ・ストーリー）NHK 出版、2013年、196ページ。
- 47) 神津朝夫著、前掲書（『茶の湯の歴史』）、176ページ。
- 48) 谷端昭夫著、前掲書（『よくわかる茶道の歴史』）、126ページ。
- 49) 京都造形芸術大学編著、前掲書（『茶の湯を学ぶ』〈もてなしの芸術の歴史と美〉）、37～38ページ。
- 50) 筒井紘一著、前掲書（『新島八重の茶事記』）、62ページ。
- 51) 熊倉功夫「わび・カブキ・きれい—小堀遠州の茶の湯の系譜」小堀宗実、熊倉功夫、磯崎新、龍居竹之介ほか著『小堀遠州綺麗さびの極み』新潮社、2006年、25～26ページ。

- 52) 実方浩信著『利休・織部・遠州の茶碗』（楽茶碗は茶碗ではない？）朱鳥社、2010年、48～60ページ。
- 53) 久野治著、前掲書（『改訂古田織部とその周辺』）、189～197ページ。
- 54) 井上辰雄著、前掲書（『茶道をめぐる歴史散歩』）、105ページ。
- 55) 久野治著、前掲書（『千利休より古田織部へ』）、53～56ページ。
- 56) 木村宗慎「乱世の終り 古田織部とその時代」楽吉左衛門、川瀬敏郎、木村宗慎著、前掲書（『茶碗と茶室』〈茶の湯の未来はあるか〉）、80ページ。
- 57) 村山武「織部のすべて」黒田和哉、村山武、古川庄作著『美濃＝志野・織部・黄瀬戸瀬戸黒』（日本やきもの②）講談社、1991年、84～85ページ。
- 58) 実方浩信著、前掲書（『利休・織部・遠州の茶碗』〈楽茶碗は茶碗ではない？〉）、36～37ページ。
- 59) 鈴木大拙著『新版禅とは何か』角川学芸出版、2008年、102～121ページ。
- 60) 神津朝夫著、前掲書（『茶の湯の歴史』）、179～181ページ。
- 61) 黒田和哉著『図鑑日本のやきもの巡り』光芸出版、1988年、291～292ページ。
- 62) 楽吉左衛門責任編集『茶道具の世界3、和物茶碗』淡交社、2000年、56～59ページ。
- 63) 桑田忠親著『茶器と懐石』講談社、1980年、43ページ。
- 64) 神津朝夫著、前掲書（『茶の湯の日本文化』〈飲食・道具・空間・思想から〉）、92～93ページ。
- 65) 仁木正格著『やきものの見方・楽しみ方』主婦の友社、2006年、58～59ページ。
- 66) 滋賀県歴史散歩編集委員会編『滋賀県の歴史散歩〈上〉大津、湖南、甲賀』（歴史散歩⑤）山川出版社、2008年、209ページ。
- 67) 小田榮一監修、前掲書（『抹茶と茶器』〈これだけは知っておきたい囊と茶人の名品選〉）、22～25ページ。
- 68) 大谷暢順著『蓮如上人・空善問書』講談社、2005年、317～318ページ。
- 69) 山田榮一執筆・指導・監修『入門・茶碗の見かた』（はじめての茶の湯1）世界文化社、1999年、84～85ページ。
- 70) 楽吉左衛門責任編集『茶道具の世界4 楽茶碗』淡交社、2000年、24～25ページ。
- 71) 仁木正格著、前掲書（『やきものの見方・楽しみ方』）、48ページ。
- 72) 講談社編『こんな愉しい日本のやきもの』（全国窯場ガイド）講談社、1998年、72～73ページ。
- 73) 小山富士夫著『日本の陶磁（改訂版）』中央公論美術出版、1985年、78～80ページ。
- 74) 谷晃著『わかりやすい茶の湯の文化』淡交社、2005年、33～35ページ。

- 75) 実方浩信著、前掲書（『利休・織部・遠州の茶碗』〈楽茶碗は茶碗ではない？〉）、37～41ページ。
- 76) 村山武「織部のすべて」黒田和哉、村山武、古川庄著作、前掲書（『美濃＝志野・織部・黄瀬戸 瀬戸黒』〈日本のやきもの②〉）、82ページ。
- 77) 谷端昭夫著、前掲書（『よくわかる茶道の歴史』）、131～134ページ。
- 78) 仁木正格著、前掲書（『やきもの見方・楽しみ方』）、76～77ページ。
- 79) H. Plutschow, *op. cit.*, H. プルチョウ著、篠田綾子訳、前掲書（『茶道と天下統一』〈ニッポンの政治文化と「茶の湯」〉）、129～131ページ。
- 80) 久野治著『ORIBE』（古田織部のすべて）鳥影社、1997年、292～301ページ。
- 81) 小田榮一執筆・指導・監修、前掲書（『入門・茶碗の見方』〈はじめての茶の湯1〉）、1999年、98～101ページ。
- 82) 楽吉左衛門責任編集、前掲書（『茶道具の世界3 和物茶碗』）、66ページ。
- 83) 黒田和哉「志野の歴史と風土」黒田和哉、村山武、古川庄著作、前掲書（『美濃＝志野・織部・黄瀬戸 瀬戸黒』（日本のやきもの②））、38～40ページ。
- 84) 矢部良明著『古田織部一桃山文化を演出する』角川書店、1999年、66～67ページ。

## 参考文献

- ・ H. Plutschow, *The Japanese Tea Ceremony, As A Political, Ritual*, 2010. H. プルチョウ著、篠田綾子訳『茶道と天下統一』（ニッポンの政治文化と「茶の湯」）日本経済新聞出版社、2010年。
- ・ W.R. Comstock, *Religion & Main: The Study of Religion & Primitive Religions*, Harper & Row, Publisher, Inc., 1972. W.R. コムストック、柳川啓一監訳『宗教』（原始形態と理論）東京大学出版会、1986年。
- ・ N. Honna & B. Hoffer eds., *An English Dictionary of Japanese Culture*, Yuhikaku Publishing CO. LTD., Tokyo, 1986. 本名信行、B. ホッフア編『日本文化を英語で説明する辞典』有斐閣、1987年。
- ・ 茶の湯文化学会編『講座日本茶の湯全史』（第3巻近代）思文閣出版、2013年。
- ・ 久野治著『千利休より古田織部へ』鳥影社、2006年。
- ・ 栗原久著『カフェインの科学—コーヒー、茶、チョコレートの薬理作用』学会出版センター、2004年。
- ・ 松下智著『幻のヤマチャ紀行』（日本茶のルーツを探る）講談社、1999年。
- ・ 神津朝夫著『茶の湯の歴史』角川学芸出版、2009年。

- ・小田榮一監修『抹茶と茶器』（これだけは知っておきたい棗と茶入れの名品選）世界文化社、2000年。
- ・玉川和子著『茶懐石と健康』（一汁三菜の知恵）淡交社、2003年。
- ・茶の湯文化学会編『講座日本茶の湯全史』（第1巻中世）思文閣出版、2013年。
- ・井上辰雄著『茶道をめぐる歴史散歩』遊子館、2009年。
- ・松尾剛次著『「お坊さん」の日本史』日本放送出版協会、2002年
- ・小川後楽著『茶の文化史〈喫茶のはじまりから煎茶へ〉』（NHK 人間講座）日本放送出版協会、2002年。
- ・京都造形芸術大学編著『茶の湯を学ぶ』（もてなしの芸術の歴史と美）角川書店、1999年。
- ・上田閑照、柳川啓一編『宗教学のすすめ』筑摩書房、1985年。
- ・神津朝夫著『茶の湯と日本文化』（飲食・道具・空間・思想から）淡交社、2012年。
- ・神津朝夫著『茶の湯の歴史』角川学芸出版、2009年。
- ・宇高政光著『お茶は世界をかけめぐる』筑摩書房、2006年。
- ・宮坂宥勝著『空海』（生涯と思想）筑摩書房、2003年。
- ・小山茂樹著『茶壺に追われて』（ほっこり宇治茶のこぼればなし）淡交社、2009年。
- ・楽吉左衛門、川瀬敏郎、木村宗慎著『茶碗と茶室』（茶の湯に未来はあるか）新潮社、2012年。
- ・桑田忠親著、小和田哲男監修『戦国武将と茶の湯』宮帯出版社、2013年。
- ・筒井紘一著『新島八重の茶事記』小学館、2013年。
- ・久野治著『改訂古田織部とその周辺』鳥影社、2009年。
- ・納屋嘉人編集発行『利休と七哲—それぞれの茶風を知る』（淡交第61号）淡交社、2012年。
- ・谷端昭夫著『よくわかる茶道の歴史』淡交社、2007年。
- ・河野逸人編集『八重の桜〈前編〉』（NHK 大河ドラマ・ストーリー）NHK 出版、2013年。
- ・小堀宗実、熊倉功夫、磯崎新、龍居竹之介ほか著『小堀遠州綺麗さびの極み』新潮社、2006年。
- ・実方浩信著『利休・織部・遠州の茶碗』（楽茶碗は茶碗ではない？）朱鳥社、2010年。
- ・黒田和哉、村山武、古川庄作著『美濃＝志野・織部・黄瀬戸 瀬戸黒』（日本のやきもの②）講談社、1991年。
- ・鈴木大拙著『新版禅とは何か』角川学芸出版、2008年。
- ・黒田和哉著『図鑑日本のやきもの巡り』光芸出版、1988年。
- ・楽吉左衛門責任編集『茶道具の世界3 和物茶碗』淡校社、2000年。
- ・桑田忠親著『茶器と懐石』講談社、1980年。



- ・仁木正格著『やきものの見方・楽しみ方』主婦の友社、2006年。
- ・滋賀県歴史散歩編集委員会編『滋賀県の歴史散歩〈上〉大津・湖南・甲賀』（歴史散歩②）山川出版社、2008年。
- ・大谷暢順著『蓮如上人・空善聞書』講談社、2005年。
- ・小田榮一執筆・指導・監修『入門・茶碗の見かた』（はじめての茶の湯1）世界文化社、1999年。
- ・楽吉左衛門責任編集『茶道具の世界4 楽茶碗』淡交社、2000年。
- ・講談社編『こんな愉しい日本のやきもの』（全国窯場ガイド）講談社、1998年。
- ・小山富士夫著『日本の陶磁（改訂版）』中央公論美術出版、1985年。
- ・谷見著『わかりやすい茶の湯の文化』淡交社、2005年。
- ・久野治著『ORIBE』（古田織部のすべて）鳥影社、1997年。
- ・矢野良明著『古田織部一桃山文化を演出する』角川書店、1999年。
- ・田中仙翁著『茶道ハンドブック新版』三省堂、2013年。
- ・佐々木達夫著『日本史小百科〈陶磁〉』東京堂出版、1994年。
- ・宮澤永光監修『基本流通用語辞典』白桃書房、2002年。
- ・宮城音弥編『岩波小辞典心理学・第三版』岩波書店、1978年。
- ・新村出編『広辞苑』（第二版補訂版）岩波書店、1980年。
- ・三省堂編集所編『広辞林』（第六版）三省堂、1983年。
- ・岐阜銀行編『なも』（Vol.42、6月）ジーベック、2011年。
- ・ジェイアール西日本コミュニケーション編『Sakaist』（創刊号、10月）堺市広報部シテイプロモーション、2010年。
- ・おりべくらぶ企画編集『おりべくらぶ』（Vol.68、2月）中広、2010年。
- ・多治見市産業観光課編『多治見ものがたり』多治見市産業観光課、2012年。
- ・『中日新聞』中日新聞社、2014年4月3日、朝刊。
- ・『中日新聞』中日新聞社、2014年5月22日、朝刊。
- ・『中日新聞』中日新聞社、2014年4月15日、夕刊
- ・『中日新聞』中日新聞社、2014年6月11日、夕刊

なお、本稿は拙稿「岐阜東濃地域とミュージアム・マーケティングについて」（～多治見、土岐、瑞浪を例として～）『紀要』第4号、名古屋外国語大学現代国際学部、2008年3月1日。拙稿「岐阜東濃地域の恵那、中津川とミュージアム・マーケティングの促進」『紀要』第5号、名古屋外国語大学現代国際学部、2009年3月1日。拙稿「道の駅とマーケティング戦略

の実践」(～岐阜東濃地域を例として～)『紀要』第6号、名古屋外国語大学現代国際学部、2010年3月1日。拙稿「製品計画の設定とブランド・マーケティングの推進」(～土岐陶磁器ブランドの構築を例として～)『紀要』第7号、名古屋外国語大学現代国際学部、2011年3月1日。拙稿「岐阜県東濃地域の活性化と将来像」(～多治見、土岐、瑞浪、恵那、中津川の観光を例に～)『紀要』第8号、名古屋外国語大学現代国際学部、2012年3月1日。拙稿「世界の陶磁器と国際陶磁器フェスティバル」(～国際陶磁器展美濃を例として～)『紀要』第9号、名古屋外国語大学現代国際学部、2013年3月1日。拙稿「日本の焼物の歴史と焼物の市」(～六古窯の常滑・瀬戸焼を例として～)『紀要』第10号、2014年3月1日。京都造形芸術大学編著『茶の湯を学ぶ』(もてなしの芸術の歴史と美)角川書店、1999年。納屋嘉人編集発行『利休と七哲—それぞれの茶風を知る』(淡交第61号)淡交社、2012年。佐々木達夫著『日本史小百科〈陶磁〉』東京堂出版、1994年。田中仙翁著『茶道ハンドブック新版』三省堂、2013年などをもとにした。